

銀色の悪魔…4th Stage(プロジェクトD編)

SilviaSilvermoon

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シリーズ4作目。結構続けてます^^;;;お話的には3rdが特別編だったので時系列で行くと

2ndの続きという事になります。(話の流れ上、3rdの内容が入ってくる場合があります。でも、

なるべく辻褄は合うようにしていくつもりで居ます。)

この辺りからは：キャラの名前以外はほぼ原作から離れてしまつて、オリジナルの話がてんこ盛りになってきますけども：まあ、広い心で見てください^^;;;

目次

さて…時系列にまとめてみようじゃないか。	1
夏の終わり…	14
超・マジモード…暗殺者（アサシン）ばりの殺気全面開放!!	27
ケーキ屋を訪れる常連さんが…	38
取り敢えずその後のプロジェクトDはというと…	46
で、週末…を前に車が無事戻る。	62

さて…時系列にまとめてみようじゃないか。

この日…さつきは休みで朝から天気も良かったので家を掃除したけどまだ午前中だったので勢いでS13とS15更に美奈子のNO TEも洗車して…たまには充電させたいって言うのもあって、

碓氷にでも行ってくればそこそこ充電も出来て楽しめるかなって思ってS15で出発し、上信越道の松井田妙義で降りて一路碓氷峠を目指す。

近所のスタンドで給油と空気圧チェックをしたついでに碓氷峠について聞いてみた。

やっぱりImpact Blueの名前は絶大。真子ちゃんが離れた後も沙雪が1人で走ってても目立つてる様だ。

さつき心の声『へえ…原作じゃ横に乗ってるイメージしかないけど、お嬢って結構走れるんじゃない。』

教えられた道を進んでいざ碓氷峠へ。誰にも連絡してないから今回はコーチも居ないし、自力で進めていく事にする。まずはグリップで50%位から3セットこなす毎に10%ずつ上げるという方法で徐々にペースアップ。平日の昼間は…さすがに空いているから飛ばしやすい。でもお巡りさんが来そうで怖いのはあるけど…ね。

何とか80%で軽くドリフトができる位にした所で夕暮れに。

さすがに夕方の混雑時は避けたかったので、今回はここで打ち切るつもりで戻りながら美奈子の勤めるケーキ屋へ。顔を出したら美奈子は休憩中で…；；；呼ぶのも大変だし…大人しくチョコレートケーキとチーズケーキを買って駐車場に戻ると…出くわしちゃうたじゃん…お嬢に。

沙雪「あれえ〜！どうしたのこんな所で珍しいねえ？美奈子居た？」

さつき『あ、今休憩みたいで居なかったから取り敢えず俺の好きなチョコレートケーキとチーズケーキ買ってきた。』

沙雪「なあんだ、言ってくればいくらでも持って行くのに。ケーキとか食べるなんて思ってなかったからさあ…男の人ってあんまり

食べるイメージ無いからさあ。」

さつき『そつか？俺、結構好きだよ？ケーキ類は。あ、さつき暇でさあ確氷ちよこつと行つてきた。結構トリツキーなんだね。スタンドのあんちゃんがImpactBlueの事推しててさ。沙雪も結構走れるつて言うのを聞いて今度一緒に行こうかなつてさ。軽く流してコースは頭に入れてきたよ。』

沙雪「あ、そうなの？じゃあ今夜デートしようよ？ね？確氷で良いよねえ？」

半ば強引に約束させられた…。そこで一瞬頭をよぎったのが…。

さつき『あ、美奈子に一応断り入れとかなないといけないか？』

沙雪「あつ、確か今日つてさあ…店舗の歓迎会があつたと思つたけどなあ？そう言われると心配になつて来たから…一応確認取つとくわ。」

ピツピツピ…スマホを巧みに操作しメールを打つて担当者に確認してる沙雪。

沙雪「あ、やつぱりきよう歓迎会だつて。8時スタートだと思うから…多分10時過ぎまでは終わらないでしょ…家に着くのが10時半とかじゃない？メモで残しておけば…美奈子のご飯も作れるし大丈夫だと思うけどなあ…？」

さつき『じゃあ、取り敢えず家にケーキ置いてメモを残してくるか何時に集合？』

沙雪「今…6時でしょう？あたしも1回帰るから7時半位にここでも良い？」

さつき『OK、じゃあ…あとでな。』

一旦沙雪と別れて家に帰つて冷蔵庫にケーキを入れ、メモを残してそのまま家を出る…

スタンドによつて一応半分よりちよつと上にあつたけど…交通費の分でこつちに給油して美奈子のケーキ屋の駐車場に向かう。

すると美奈子がまとめたゴミをストッカーに入れるため出てきたので、今日歓迎会なのを確認。冷蔵庫にケーキが入つてると沙雪と

会うので美奈子の方が早かったらご飯食べて適当にしてって伝えて車に戻るとちようどお嬢が来た。

2台で一旦お嬢の家にシルエイティを置き、S15で碓氷へ。

沙雪はS15に乗ったのが初めてだったこともあって常に上機嫌。とりあえず80%で碓氷を1周してみることに。

沙雪「驚いた：今日の昼間だけでここまで走れちゃうんだ（早めに出てきてた地元の小僧たちより速い”湘南ナンバーのS15”に沙雪が素直に驚いている）：さすが”銀色の悪魔”もうちよつと一般車が減ってC1121がガラ空きになったら全開のドリフトしてるの見たいな^^」

さつき『そしたら：先に夕飯食べちゃうか？時間ずらしてもう1回来れば良いじゃん。』

そして夕飯を食べて：良さそうだったので90%をすつ飛ばして横に指示してくれる人が居るので

一気に全開：沙雪が測ったストツプウォッチの一発勝負の記録は：公式記録での最速の下りの記録：真子ちゃん運転のImpact Blueの持つ記録を一気に12秒更新しましたとき^^；；；やっぱりC1121の全開でドリフトは面白い^^

沙雪も喜んでくれたしプロジェクトDの練習にもなるし大満足です^^♪

(※——)からはさつきsideで進行します——)

碓氷から帰って来て：休みの度に出歩くようになった。

神奈川を含めて転戦が予定されてる峠をめぐりながら、自分なりにコースの攻略を考えてみる。

ケンタの持つて来る車載の動画の運転が無茶苦茶で正直あてにならない。

”良くこれで拓海や高橋 啓介が理解できるんだなあ？”と感心してしまっ位^^；；；

(俺の理解力の問題かも知れないけども：モノには限度って言うので

しよ?^^;;;;)

って事で最近では自分で現地に行くようになった。

(※もちろんピンチヒッターの件は頼られ過ぎても困るといふ事で高橋 涼介からも口外しないように言われている為、拓海や高橋 啓介に遭わない様にしてるけどね(;;^^)A。)

ただS15やS13は目立ってしまいうので専ら偵察にはNOTEで行って、まずは現地の地形などを歩いて確認…その後走ってみるパターンが多くなった。(※こう言う事があったので、S13を美奈子にやって群馬ナンバーに交換したNOTEと交換でも良いなっと思ふようになった。)

久々に高橋 涼介が会いたいと言ってきたので、早番で上がる日に高崎駅近くのファミレスで待ち合わせた。俺の方が先に着いた為S15を置き、奥の方の入り口からは見えにくい所の席でドリンクバーを頼んでコーラやメロンソーダーを飲んでいた。

高橋 涼介「ワイワイ、もつと何か頼んどけば良いのに…質素だなあ?」

さつき『おつ…来たねえ。って言うか、経費掛かり過ぎてんじやないか?かなり移動の交通費だけでも凄まじい額だろうに…』

高橋 涼介「まあ…それ位は計算に入ってるさ。さつきの交通費だつて出そうと思つてたんだぜ?領収書持つてるか?」

さつき『とりあえず取つてはあるけどさ…群馬、栃木、埼玉だけで交通費が3万超してるぞ?』

一応俺もスタンドの社員だからガソリンやオイル、タイヤに対しては従業員価格つてもんがあるから良いけど…高速代だけは何ともならなくてな。』

高橋 涼介「それで最近S15やS13ではなく…従妹のNOTEを使つてるのか?」

さつき『おいおい、ずいぶん詳しいじゃねくか?従妹の美奈子を狙つてるのか?』

まあ、ガソリン代だけじゃないさ。NOTEの方がより風景に溶け込みやすいから

拓海や啓介の目をごまかしやすくなつてき。ピンチヒッターの件は極秘なんだろう？少しでも目立たないほうが良からう？』

高橋 涼介「まあな…あのS15は目立つからな。地元の連中も意識しだすだろうしな…そりゃ構わないが従妹のNOTEの距離が延びると問題出ないのか？」

さつき『だから問題がら出る前にあのS13と交換しておこうかと思つてな。』

高橋 涼介「そうか…あのS13をなあ。ああ、ちよつと調べさせてもらったが…

従妹の美奈子さん…だっけか？あの人か”漆黒の闇に浮かぶ銀色の幽霊（ゴースト）”

だったなんてな…この前S13を振り回して使つてるのを見かけたもんでな…

ちよつと調べさせてもらったらさつきの所のスタンドに入つていくから関係者で間違いないと思つたんだが…まさか従妹で”銀色の悪魔”と”漆黒の闇に浮かぶ銀色の幽霊（ゴースト）”がこの群馬で同居してるなんて考えもしなかつたぞ？

昨日、親戚の叔母さん達が来るつて言うんで、急遽ケーキ買いに行つたら、接客で出てきて驚いたさ。向こうは”何でここに？”つて言う顔をしてたけどな。」

さつき『へえく色々調べるねえ…ふむふむ、そんな事がねえ…つて言うか

群馬の走り屋の頂点の高橋 涼介がケーキを買いに行くつてかなりレアな感じするけどな…

へえく想像つかないな。フッフ（、艸、）あ、ついでに言つておくとな…

あのケーキ屋の社長令嬢が碓氷のImpactBlueの沙雪だわ。何とかして美奈子を真子ちゃんの後釜にしようとしてるみたいだけどな…』

高橋 涼介「ほう…それはそれでまたすごい取り合わせではあるが…厄介な相手になる事は間違いないな。」

さつき『まあ：厄介であることに間違いはないと思うけどな。確氷は厳密に言えば長野との県境だし：関東に入れなくて良いんだろう？』

冗談を言いつつも今後の転戦の順番などを決めていく。一応相手の前情報を基にレベルを徐々に上げていく方向で検討を進める。

そうすると奇しくも神奈川が最終という事になった。ある意味神奈川は自分で言うのもただけだけどそこそこのレベルは高い方にあるんじゃないかと思う。

ただ：このプロジェクトDの2人もなかなか育ってきていると思うのは確かだ。

うかうかしてたら自分だってヤバいのに：神奈川に今居ないからって言うのもあるけど、名前の挙がってる奴等って：圧倒的に俺の世代より年下なんだろうと思う。

知らない名前ばかりだしね。

神奈川はかなり早めに偵察に行かなくちゃいけないかなって高橋涼介の言葉を聞きながら思っていたりする。

1時間ほど話し込んで高橋 涼介に交通費のレシートの束を渡しその倍以上の額をよこしてきた。おつりは今後の交通費の足しにしてくれだつて^^；；；キザだねえ：まあ、ありがたくだいて店を後にする。高橋 涼介の行動も探りを入れておかないとな：美奈子に手を出されたりしてもちよつと困るし：とかいろいろ思案しながら戻っていった。

さて：プロジェクトD始動して快進撃は続く：ので、ここらで1発、サプライズを仕掛けるとしますかねえ…。

蒸し暑くなつてきて朝晩との気温差が体力的にどう影響出るか：特に拓海は普段トラックドライバーをしている。目や肩、腰に相当な疲労を抱えてるに違いない。

取り敢えず自分が早番で拓海も早上がりの日を狙って：スタンドのお客さんでもある整体屋の先生のところ連れて行く。

拓海「さつきさん…別に俺はいいつすよお〜」

さつき『センサー悪いトコは気にせずガンガンやっちゃってください！』

拓海「ちよ、ひどつ！ギヤアアアアアア！」

さつき『悪い所はしつかりメンテしとかないと！それは高橋 涼介からも言われてる事だしな。(※大嘘。言われちゃいないけど、体が資本…これ位しかサポートできねえし…悪く思うなよ。)』

拓海「いでええええ!!センサー！そこっ！やっべええ！そこは何!!! シヤレになんねえ〜つすよおお!!」

センサー「ああ…ここは胃腸だろ…で、ここが肩と目の関係で…」
拓海「うおおおお!!!!ひいいいい!!痛つてええ!!!!やめてっ…くっぐはっ!死ぬ〜!!」

センサー「肩甲骨の周りの筋肉がゴリゴリじゃねえか!何でこんなになるまで放っておいた?」

施術の間…一旦外に出て一応高橋 涼介に電話。

さつき『あ、もしもし〜高橋 涼介さんの携帯でよろしかったですかねえ?毎度お世話になってますう。〇〇エネルギー渋谷SSの小長井ですけども…』

高橋 涼介「何だよ?よそよそしいな…職場からか?」

さつき『うへへつまあ…半分は仕事みたいなもんかな。今、拓海を連れて整体屋に来ててさ…あいつ仕事がトラック運転手だろ?目、肩、腰を酷使するじゃん?』

で、プロジェクトDに影響が出たらヤバいと思ってね。スタンドのお客さんの所の割引券貰ったもんでさ。ゴリゴリやつてもらってる所さ。

ただ、お宅の弟にもしてもらわなきゃとは思うが…

予定が解らないからな?割引券持って行くから好きな時に受けてもらってくれよ。

あくまでも俺は公平に見てるつもりだからな。

拓海だけに肩入れすることはしないから。それを伝えたくてな。』

高橋 涼介「そっか。ま、そう言う事なら俺も反論は無いな。ドライバーへの負担がこれからますます大きくなる…費用は俺が持つから。今度会ったときに渡すさ。了解、じゃ割引券サンキューな。」
(ピツ…) 電話を終えて治療院に戻るとさんざん騒いでグツタリとした拓海が抜け殻のように座っていた。

さつき『センサーありますがどうぞごいました。これでバツチリ良くなりますよね?』

サプライズのついでに…?? (マジか!嘘だろおおおおおおおおおおおおおおおお!!勘弁してくれえ!!)

センサー「じゃあ次は副店長行ってみようかあ〜!」

さつき『センサー?ちよつと待って今日1人分しかお金持っていないし、俺はまた別の日に来るからさああああ!』

センサー「いやあ、今日はお客さん連れてきてくれたしサビス、サビスウ〜(^^♪)」

さつき『んなアホな!フィリピンパブのお姉さんみたいな言い方せんでも!うつそ〜!いっででっ!いででっ!いつつでええええええ!!マジでやべえ!!!ひいいい〜!!』

拓海「センサー!さつきさんもお疲れみたいなんで思いつきり疲れの元を取っ払っちゃってください〜!」

さつき『マジか!拓海!!!おまえってやつわあああああ!!』

拓海「何て仲間思いなんですよw俺が苦しんだ分、苦しんでくださいね^^」

さつき『マジこれ痛ってええ!センサー!ここ何よ!イタタタタタタ!!!』

センサー「ここ?ここか?腎臓と肝臓だな…普段から冷たい物を飲んでると、客が来てトイレ我慢しすぎてないか?」

さつき『あゝあゝあゝあゝ!!!うっはあああ!!!痛ってえええええええええ!!!ギブギブギブ!!!』

★思わぬ逆襲に遭い…疲れを取りに行ったのか逆に貰っちゃった

のかわからない位で…帰宅。(チーン)

美奈子「お帰り…つて何？メツチャ疲れてない？」

さつき『おおう…今日さあ…プロジェクトDの方で連戦が続いてるじゃん？だからと思つて気を利かせて拓海を連れてスタンドのお客さんのやつてる整体屋に連れてつてメンテナンスしてもらったんだよ。割引券貰つたのもあつてさ。そしたら…1人分しか金持つてなかつたのに俺まで巻添え食らっちゃつて…ゴリゴリやられちゃつてさ…元々46…もう47になる人にはめっちゃ堪えたわあ…』

美奈子「あ、そんな割引券あつたん？そしたらあたしと沙雪と真子ちゃんの3人で行つてみるかなあ…あたしも首と肩がひどいんだよね…。」

さつき『なにに？お前Mなん？めっちゃ痛いし、こんな状態になるぞ？良いのか？』

美奈子「でも、翌朝にはスッキリしてそくじゃん？」

さつき『そりゃ、そくかも知れんけども…』

美奈子「じゃ割引券3枚よろしく♪」

さつき『はいよ。後悔しても俺は責任取らないからな。』

美奈子「Thanks!」

そう言い残して自室に消えていく美奈子。ソツコーで沙雪に電話をかけてる。

美奈子「あ、沙雪？あたし、美奈子だけど…今、さつきから割引券貰つたから真子ちゃんも誘つて整体に行かない？最近疲れてるじゃん？あたし達。」

沙雪「へー整体ねえ…身体が歪んでるとお肌の具合とかダイエットにも影響あるとか聞くよねえ…」

美奈子「でしょでしょ？女子力上げておけば相手が見つかった時にもアタフタしなくて済むし…それに、沙雪はさつきとお付き合ひしてるんだから、そういうの大事だと思うよ？」

沙雪「んーじゃあ、とにかく真子にも聞いてみるわ。今夜返事でき

るかどうか解んないけど良い？」

美奈子「ああ：割引券の有効期限はまだ3か月くらいあるから急がなくても良いからね。」

沙雪「オツケwじゃあ連絡しとくね。」

そしてこの後に真子ちゃんに連絡を取ったら、

真子「へえ：整体ねえ。確かに体が痛い時あるし：受けてみようかなあ？」

という前向きな回答に3人で一緒に行くって事で、週末3人で治療院を訪れ：

すっかり施術してもらった。(でも、拓海やさつきほど大騒ぎにはならず、むしろイタ気持ち良い位でドリフトのキレも良くなったとか…)

(注：あくまでも個人の感想が含まれています、～；；；)

整体は良いけど：でも、その後にタピオカミルクティー飲んでやダメじゃね？って突っ込む余地がありませんでした：(さつき&池谷注。)

口コミとガソリンスタンドで配る割引券の効果もあってか：整体院に通う人も増え、

センセーには充分感謝され、高橋 啓介から連絡があつた時にも施術をお願いしますってしつかり根回ししておきました。(※後日、高橋家に割引券を10枚ほど郵送で送っておきました。高橋 啓介も絶叫したそうです。)

そして数日経って：さつきが群馬に来て2度目の夏を迎え、相変わらずスタンドには常連さんがいっぱい、～；；；

まあ嬉しい事なんだけど、時々收拾がつかなくなる時が…。

今日のメンバー店員side：

店長(遅番)、池谷(珍しく配達と集金日が重なって中番)、樹(↑休みなのになぜか私服でいると言う：暇人か？、～；；)、さつき(バイトの手配が付かず遅番)

客 side：健二、沙雪、真子ちゃん、美奈子、拓海（↑会社のト
ラックの給油に寄ったら皆が居たパターン）

店長「何だあ？今日はまた、すごいメンツが揃ったもんだなあ？」
さつき『これだけ揃うとカオスを通り越して收拾付かなくなりませ
よね^^;;;』

池谷「店長：これじゃ他のお客さん入ってこれないから：とりあえ
ず片付けちゃいますね？おくい、樹！付き合えよ。」

樹「もちろんっすよお。」

さつき『じゃ、俺、メーターとタンク残量取っちゃうね。』

拓海「あ：じゃ、俺ゴミでも片しますね：」

店長「お前さんは良いんじゃないのか？まあ：3年間バイトし続け
た習性ってやつなんだろうけども：」

店員組はテキパキと行動：健二も取り敢えずテーブルとか拭き始
める：

女子チームはソファに座って全体の帰りに寄った美奈子行きつけ
のタピオカミルクティーが絶品だったとか：あそこのパンケーキは
おいしいだのと sweets の話題で夢中になっている…

一方、水道の脇では洗った空き缶用のゴミ箱を片付けながら樹と拓
海が話してる。

樹「それで：プロジェクトDの方はどうなんだ？ここんどこ毎週末
連戦だろ？仕事しながらだと厳しいよなあ？」

拓海「まあ：正直、週の中頃が1番厳しいかなあ。土日の疲れが月
曜と火曜の仕事で増幅されて：水曜と木曜は惰性で何とか仕事をこ
なしてる：で、金曜の夜から走りこみ、土曜の夜に交流戦。交流戦の
後、日曜の早朝までにタイムアタックまで終わらせて朝食食べて撤収
：ってパターンが多いしなあ。あ、この前：さつきさんに、このお
客さんの全体のセンサーのどこ連れていかれて：ゴリゴリやられた
^^;;;」

樹「そっかあ。無理してるからやられたらすぐえ痛かったんじや
ね？の？」

拓海「そりや、もう…痛いとかの比じゃ無え〜って。逆に痛みがジンジン残ったまま家に帰って…でも起きたらすつきりしてたけどな。」

樹「それじゃあ…一応効果はあったんだ？」との問いに…

拓海「ん〜、効果はあったけど施術中の痛さを考えるとさ…よつぽどの事が無い限り、自分から足を向けることはないと思うなあ。」

樹「そんなに痛いんだ…でも、さつきさんもお前の事を気にかけてるからじゃね〜の？」

拓海「まあな。高橋 涼介さんとさつきさんで相談して決めたらしい。そう言えば、最近 啓介さんも受けに行くんだか行っただかかって聞いたぜ…」

樹「そりや、それでハイ〜ハイ〜言ってる高橋 啓介の姿も見てみたい気はするけどなあ…ウヒヒッ。」

拓海「お前…性格悪いぞ？他人の不幸を喜ぶなんて…ま、とぼっちりでさつきさんも受ける事になって悶絶してるのを見て笑ってた俺も同じだけど…な。」

樹「何だよ…お前だって俺の事言えないんじゃない。」

拓海「ま、そ〜ゆ〜ことだ。あははははw」

こんな話をしながら片づけを終わって中に入ってきた2人。

樹「店長〜外の片づけとゴミ捨て終わりましたあ。」

店長「おう、お疲れさん。缶コーヒーで悪いけど飲んでくれよ〜。」

樹、拓海「「あざ〜っす!!」」

池谷「店長〜、こつちも洗車機の洗剤類の補充とノズルのエア・パージ、それに操作盤のロックと電源OFF確認しました。」

さつき『こつちもタンクの在庫量とメーターの記入終了です。お疲れ様です。』

店長「おう、2人ともおつかれ〜！缶コーヒーでも飲んで休憩してくれ。俺は日報まとめちゃうから。」

さつき、池谷『了解です、』

健二「一応、雑巾がけと水撒きも終わったぜ」

さつき『お、健二君、ありがとうね。これでも飲んでよ。は〜い。』
良く健二の飲んでるオレンジジュースを渡す。

健二「うっほ〜、さつきさん解ってるう〜ありがとういただきます。」

さつき『あ、お金は店長から出てるから店長にお礼言っついてね、』

※この後：みんなでちよつとした食事会に出かけ：なんだかんだでこの世界のの人達と仲良くできてる。

良い人達だから：もう離れらんないな：とさつきは思っていた。

それは同時に美奈子も思ってるようだったけど：また折に触れて書きます。

夏の終わり…

息抜きに伊香保の日帰り温泉に入浴中…

さつき『あっちいけど、やっぱり温泉は良いなあ。』

ポツリと眩きながらチャポ…つと水音を立てて湯船から上がって脱衣所の扇風機で頭と体を冷やし、駐車場に出てくると…スーツとS15の横に着く黒のS13。

さつき「ん？美奈子…何でここに？仕事はよ？」

美奈子「あたしだって疲れるんだって…；；；」

沙雪「そしてあたしももちろん居ると…」

さつき『ホント、仲が良いよなあ』

ついでにここに来たなら…という事で2人も入浴に行ったので、

俺は伊香保神社でプロジェクトDの成功を祈願しつつ…帰り道に温泉まんじゅうを買って車で食いながら待つ事に…携帯で天気とか渋滞情報を見ながら時間をつぶす。

沙雪と美奈子が出てくる…そしてこの後…2台で向かったのは秋名山。ホントはもっと遠出したかったけど時間も時間でもどうにもできないので近場で遊ぶことに…

頂上に向かう道路で…見た事のあるインプレッサの2ドアWRXを発見…拓海の親父さんか？

拓海とはまた違った走り方で一瞬面喰ったが…俺も美奈子も食らい付いている…で止まってくれるのかな？今ので70〜80%位かな…全開だったら置いて行かれてるかもな…；；；；

お、降りてきた。やっぱり藤原文太…その人ですなあ。

文太「よお、あんたもしかしてGSの人かい？」

さつき『そうです、そうです。最近副店長になりました小長井さつきと言います。えつと…拓海君のお父さんですよねえ？』

文太「おお、やっぱりな。いつも息子がお世話になっちゃってねえ。藤原文太と言います、よろしく。シルビア系に乗ってる連中で俺に

くつついて来るのが殆ど居ないもんでねえ?」

さつき『あはは、；；；；；; そうですか? あ、後ろのS13から出てきたのが俺の従妹で小長井美奈子と言います。一応群馬に来るまで地元の神奈川で走ってました。』

縁があつてこつちに来てから1年半位ですかねえ：池谷君達とつるんできます。』

文太「それに：：高橋 涼介とかも含めてプロジェクトDってのもやってるんだろう?」

さつき『ああ：俺はあつちも秋名スピードスターズに關しても裏方です、；；；；;』

文太「その割にはずいぶん熱心にいろんな所に走りに行つてゐるじゃね〜か?」

さつき「敵陣視察みたいな事はもちろんしてますよ。コースの下見をしてよりの確にドライバーにアドバイスできればって：まあ、俺が直接言わないで高橋 涼介に言ってもらう様にしてますけどね。」

文太「ふむふむ。そりゃあ：何かの意図があつてやつてるのかい? 自分で前に出ずに高橋 涼介を前に出すって言うのは：。」

さつき『いやあ、至極簡単な事です。高橋 涼介の方が語彙力があるので誤解無くドライバー2人に伝わりやすいって事と俺の存在は極秘なんですよ、；；；；; 影武者って言うか：忍者みたいなもんですね。』

文太「つて事はだ：2人のうちどつちか、または両方に何か車とか本人がトラブルに巻き込まれたつて時にここぞとばかりに相手が日程調整を拒むことだつてある：」

俺らの時代にもよくあつた事だがな：その時に初めて出て来るつて事なんじゃね〜のかい?」

さつき『メツチャクチャ鋭いすね、；；；；; あくまでも俺は実力的には劣つてゐる所もあるでしょうけどね：あの2人よりちよこつと長く生きてゐる分、何か爪痕を残す事位はできるんじゃないかつて思ひましてね。』

文太「イヤイヤ、謙遜しなくたつて解る：多分俺から見えて：そつち

のお嬢ちゃんも含めての話になるが、おたくら2人はうちの息子や高橋 啓介よりも実力が上だと思うぞ？ 神奈川で：何か通称みたいなもの：付けられてなかったか？」

さつき『んゝまあ：車の色からでしょうけど』 銀色のなんちゃら“とか：言われてたみたいですよ？（↑できるだけ核心には触れない）』
文太「そうか：なるほどねえ。でも：俺の時代にも似てる名前を呼ばれてる神奈川の走り屋が居たなあ。“銀色の悪魔”と“漆黒の闇に浮かぶ銀色の幽霊（ゴースト）” って言ってな。」

美奈子も聞こえたのだろう、下を向いて沙雪と何やら話をしていく。俺は：この場をどう乗り切ろうか思索してるが、動揺はなるべく顔に出さないようにしてる。（もしかしたら店長とかに聞いてるんじゃないかなろうか：とか深読みしだしてるさつき。）

文太「ま、ちようど良いや。ちよつとこの下り：付き合ってみないか？ 足回りを変えたんでテスト：と思ってたんだけどな。試しに乗って意見を聞きたくてな。」

さつき『ああ：そう言う事でしたら：喜んでテストドライバーさせていただきますよゝゝあ、美奈子ゝ！ 悪いけどそのS13ここにおいでお前さんS15で先行して。俺、ちよつとインプレッサ運転させてもらうから』

美奈子「え？ あ、そうなの？ じゃあ：S13をそつちの端つこに停めて来るわ。」

スピンターンして一気にバックしてピツタリ端つこギリギリにつけてくる美奈子

文太「良いウデしてるなあ。あれが”漆黒の闇に浮かぶ幽霊（ゴースト）”の走りか：（ボソツ）」

（はいっ？ 素性：バレバレっすかね!? やめてくれよおおお：心臓に悪いってばあ：生きた心地しねゝし！ゝゝゝ；；；）

さつき心の声『（ワイワイ、おっちゃん、一気に核心を突くなつてば！ どうしてここの世界にや爆弾を炸裂させるやつが多いんだか：ゝゝ；；；；シヤレになんねゝ事をサラツと：）』

俺は文太の言った事を聞こえなかった振りインプレッサの運転

席に座った。

さつき『いやあくやっぱこのエンジン音といい、回転の上がり具合といいメツチャ：独特。えっとじゃあ：グリップで行って1往復してから攻め込んで行く感じで良いでしょうか？』

文太「いや、小手調べは置いといて自分の腕を信じて一気に行ってみてくれないか？」

さつき『うわお！そうですか：じゃああ：まあコースは頭に入ってるんでギリの境界線を狙ってみますね。』（美奈子に目配せをして沙雪にタイムを計るように指示。）

先行後追い方式でS15が出るのとほぼ同時にアクセルを踏み込む。

ギアのつながりがドンピシャ。思わず1コーナーを曲がってる最中に

さつき『へえくセツティングでこんなに違うんだなあ：4駆って感じが全くしない。こりや速いFRって言っても言い過ぎじゃないや：（ポツリ）』と呟いたのを聞き逃していない文太。

コクコク頷いてる。なら“FRっぽいライン取りができる”と踏んで思いつきS15の時と同じラインにシフトする。

するとこの読みが当たり、流すコーナーも流さないコーナーも溝落としてもハナツから面白いように決まる。

さつき『え？4駆って言うのをマジで忘れるなあ。完全にFRのラインで走ってるのに全く無理な感じがしない：ランエボだったら絶対こんなラインでなんて走れない：。』

前を走ってる美奈子とジリジリ距離が詰まっていく。でもこれは美奈子が遅いわけじゃない。（この車がモンスターなんだ：すげえモン作って来るなあ。）

心底このおっちゃんの底力に驚いてしまう。（つてか設定じゃ4、3だから元の世界の俺の方が年上なんだけどね、；；；）5連続ヘアピンを溝落として抜けると感動して文太に言う。

さつき『そうですか：こりや、楽しいし拓海君を更に上に導いていく車なんです。正直4駆なんでしょう？つて思ってる所があった

んですけど、断言できますね。ある一定以上の腕を持つてるFR使いを更に上に引き上げるって言うか…育てる車だつてね。きつと今より2段階は上に行く気がします。』

正直な感想を言うとは…

文太「初めてでこんなに乗れるとも思ってたんだが…」銀色の悪魔”に俺の意図は伝わったみたいだし、このセッティングで行つてみるか。」…え）

はい？つて聞き返したくなる位いきなりなんちゅく爆弾を落とすてきやがるんだか。思わず絶句してしまった。イヤイヤ、この状況で受け身すら取れる訳ねえくじゃん…；；；；

さつき『へっ!?何か物凄い事をサラつと…たつた今、聞いた気がするんですけど?』

文太「まあ年齢が合わねくとは思ってたんだけどな…祐一から聞いてもしかしたらつて思うようになってな…まあ通称の話は聞いてなかつたんだがな。」

あんたが”銀色の悪魔”ならあのお嬢ちゃんが”漆黒の闇に浮かぶ銀色の幽霊(ゴースト)”だろう?」

それ位運転を見りやわかる。あのお嬢ちゃんだつて下手じゃねえ。それどころか今の若造より全然懐の深さが違う。昨日今日走つてできる芸当じゃねえ。」

さつき『はあ…じゃあもう既に大体の事はご存じつて事なんですな…俺とか美奈子の事。』

文太「まあ…いつの時代からここにやつて来たのはわかんねくけども…運転を見て少しも鈍っちゃいねえ…いや、むしろ俺が現役の頃に聞いた噂よりどんどん右肩上がりに進化してるような気がする。」

さつき『まあ…元々居たのが2020年で俺も美奈子も46、7歳でしたからね…ホントならおっさんとおばさんですからねえ。(笑)』

この世界に来て急に22ぐらいの頃に戻されたつて…毎日乗つてないと勘も鈍つて来るし不安でね…；；；；昔より慎重になった気がしますけどね。あ、ちなみに高橋 涼介はこの事(2020年からやつて来た事)を全然知りませんから…通り名を何となく聞いたこと

がある位の、ある種の都市伝説みたいな位の扱いでしたからね…』

文太「まあ、その高橋 涼介にも勝ったから一目置かれるようになったんだらう？あの男は若いがきちんと礼儀はわきまえてる様だからなあ。ウチの拓海も含めて今後ともよろしくって事で。」

さつき『イヤイヤ、こちらこそ…いろいろとご指導・ご鞭撻の程よろしくお願ひしますよ。』

文太さんとの初対面がこれって…今後どうなってくんでしょ～
～；；；お見合いしてるんじゃないんだから…とか後になって自分でツツコミ入れてるし。

※何だか自分の与り知らない所で物語がどんどん形成されていくような気がした。(何か怖っ!!) そんな時に…タイミングが良いんだか悪いんだか解らんけども…

(※—side changeここでは さつきside↓Nos
ide (≡作者のナレーション目線) にて進行します—)

緊張の中…さつきと文太が会話してる所にカットインしてくる美奈子と沙雪。

まったくこの2人はタイミングが良いんだか悪いんだか～；；；
美奈子「お〜い！さつき！さつきのタイムこんな感じだつてさ。」

文太「ん？タイム？今の下りの…計測してたんかい？」

沙雪「ええ。さつきから視線を感じたんで、取り敢えず測つておいた方が良くはなつて～；；；」

(ストップウォッチを文太とさつきの前に出す沙雪。)

さつき『ん〜つと…どれどれ？おっ…この前高橋 涼介とバトルした日にベストタイム更新したタイムアタックの時と同タイム…で、美奈子が1秒遅れって事はバトルの時の俺のタイムか…良い感じじゃないですか？』

文太「2人とも初めて乗った車でこんなタイム出せるんだなあ。正直驚いたぜ。」

さつき『この車の戦闘力はこれを見ても明らかですね。間違いなく第1級の戦闘力を持つてる良いマシンですよ。』

沙雪「ちよ、ちよつと待ってよ…2人共初めての車でいきなりこんな凄いタイム出ちゃうの？普通じゃありえないって…何なの？あたしにや、理解不能だわ^^;;」

肩をすくめて両手を胸の横辺りで外側に広げリアクションを取る沙雪。

文太「まあ…常識に囚われてたら記録は伸びねえ〜つちゅ〜こつたな。考えて考えて…それをホームコースで確かめて。10個考えたうちの9個ダメだったとしても1つ残ればそれが自分のスキルになる。テクニツクなんてもんはそんなもんだ。その中の1つが…」

沙雪「溝落とし…ですか？」

文太「そう言う事だ。しかも秋名の溝の使い方は2通りある。…”ツツコミでアンダーを出さない為のツツコミ重視の溝走り”と”コーナー出口での脱出速度を稼ぐ為の立ち上がり重視の溝走り”があつてな。どっちの技も入るタイミングも飛び出すタイミングも微妙に違うんだ…。こればっかりは練習しないと説明が難しいんだけどな。ま、この2人はどっちも出来てるみてえ〜だから恐れ入るがな。」

さつき『俺らの場合は…神奈川のヤビツ峠とか箱根の奥とか…使えそうな所が何カ所か存在してて実際に使って走ってたからこそ、ここが出来てるんですよ。いきなりやって出来てる訳じゃないですわね。』

美奈子「あたしはさつきの受け売りって言うか…最速のラインを見せて貰うとこれから通らなきゃいけないラインが見えてくるようになるんです…そこを通るにはどうするべきか…つて事で溝落としをやり始めたんですけどね。」

ものすごく特殊な才能をサラツとぶっちゃける美奈子と…ウンウンそうだねえ〜と頷いてるさつき。↑あつさり言っちゃってるけど…実はものすごい事言ってるよ？(BY作者)

“そんな事があるのか!?” 呆然としてる文太と沙雪。追い打ちをかけるように美奈子の言葉が続く…。

美奈子「え? あたしだけなのかしら…その見えるラインにトレースする様に車の中心を合わせていくと…出来ちゃったって言うのが正直な所で…」

沙雪「あ…あたし、前に碓氷で拓海君とバトルした時…真子がオーバースピードで曲がり切れなくてスピンドで逃げた時直後に居た拓海君が避けて横を抜けて行ったの…後で聞いた時に同じような事を言ってたわ。拓海君以外にもそういう人っているのね…」

文太「そりや、よっぽど集中力が高いのと…動物的勘ってヤツじゃねえかな。感覚が鋭いんだと思うぜ。要はホームでやってる事を他所でも同じようにやる…って言う事だからな。だからってそのラインが見えるって言うのは誰にでもできるってもんじゃないからなあ。その感覚は大事にした方が良いぞ? そっかあ。凄えく事を聞いたもんだな…じゃ、また会おうぜえ^^」

と言って文太はインプレッサに乗って去っていった。

そして3人でS15で頂上を目指し、S13を取ってきた後…ケーキが食べたいって事でバイパス沿いの美奈子の居た店舗へ。

そして沙雪の権限で新作の“プリンタルト”を含めた数種類のケーキを無料で包んでもらうと言う暴君っぷりを発揮。(↑まかり通る事自体がものすごいと思うけど。アセアセ^^;;)

その後合流した真子ちゃんと共に4人でケーキをおいしくいただけただけども…良いのかな?

(※——)からはさつきsideで再び進行します—)

秋名の峠で文太のインプレッサと出会って10日ほど経って…

季節も秋に入り残暑の中にも朝晩過ごしやすくなってきた。

プロジェクトDの遠征の方も、終盤戦に差し掛かって…東京に入れるけど○○○峠

(※ちなみに原作では○○○峠(ヒントは漢字3文字)って有名なのに出て来ないのは何でか…ある意味黒歴史だから敢えてHPに載せなかつたんだってさ…^^;;)

と神奈川2戦を残すだけになったその日…俺は早番で上がっていて、休みだった美奈子と沙雪、真子ちゃんの4人でたまにはプロジェクトDの応援に行こうかという事になり…

(※実はその他に妙な胸騒ぎを覚えていたのもあつただけ…変に心配させたくもないので周りに言っていないが。)

シルエイティの初代ImpactBlueチーム(真子&沙雪)とS15の方に俺と美奈子という布陣で出発。八王子で高速を降りた時に俺の携帯に電話が。横に居た美奈子が電話に出る。

美奈子「はい、もしもし小長井さつきの携帯ですけども…」

高橋 涼介「ん？あ、あの…もしかして従妹のえつと美奈子さんですか？高橋 涼介です。今つてさつきは…運転中ですか？」

美奈子「あ、はい、今八王子で…これから○○○峠に向かおうとしてて…」

高橋 涼介「おお！助かった…じゃあ…あの、ちなみに今日車つてどれで来てますか？」

美奈子「俺の顔を見てから」さつきのS15と…友達の初代ImpactBlueの2人も誘ってるのでシルエイティで向かってますけど…」

さつき心の声『何だろ…こつち見ながら話してるのがヒジョーに怖いんだけど^^;;; はっはくん解つたぞ…何かあつたな。緊急の代走要請だわこりゃ。』

高橋 涼介「詳しくはこつちに着いてから話しますけど…さつきに代走を頼みたくてね。」

美奈子「あつ！え？そうなんですか？どつちを…へっ!?!じゃ…2人ともトラブルに巻き込まれたんですか？」

さつき心の声『あつそう…2人ともアウトですか…って事は食中毒か練習中に何か…妨害工作にでもあつたのかな？どつちにしても

気を引き締めて行かなきゃいけないさそうだな。あくあ…やつぱりね。いつかこんな事があるかも知れないな…とは思ってたけどさ』

高橋 涼介「…そうなんですよ2人とも出られなくなってしまうってね。もしかするとさつきが往復するか…美奈子さん、貴女がどっちか走る…って事もあり得るかもしれないので…美奈子さんも神奈川では有名な…」漆黒の闇に浮かぶ銀色の幽霊(ゴースト)“ですもんね。”

美奈子「はい？ なつ、何でそんなこと…まさかさつきが？ (こつちをチラチラ見ながら話してる…疑われてるのか?)」

高橋 涼介「イヤイヤ、これは俺の勘ですよ。さつきが”銀色の悪魔”なら貴女が…ってね。」

高橋 涼介との電話で固まってる美奈子…まさかバレてるなんて思ってたなかったんだろうな…；；；

高橋 涼介の声が運転してる俺の耳にもうつすら聞こえてくる。

高橋 涼介「さつきのスタンドに入って行ったんで関係者だな…とは思ってたんだが、あんな派手にハイカム、ハイコンプ仕様のS13をいきなりおもちゃのように使えるなんて…普通じゃありえない事だ。それにNOTEですら中身は全然別物だと思ってたんだが…でも、そのもともとアンダーパワーなNOTEがやってる事と言えば足廻りとマフラーとCPUだけ。せいぜい120〜130PSも出てれば良い方だろう。そんな車でその辺の走り屋連中より速いとなると、ウデが飛びぬけていると考えるのが普通だ。

それだけのウデを持っているなら神奈川でも相当有名だったんだろうと…ね。”銀色の悪魔”の関係者…でウデが相当ある…もう”漆黒の闇に浮かぶ銀色の幽霊(ゴースト)””しか頭の中に選択肢が浮かばなくてね。しかもこの仮定が全ての要素を結びつけて辻褄が合ってしまう…違いますか?”

美奈子はグウの音も出ずに瞳孔が開ききって心臓の音がバクバク聞こえてきそうな状態…

見かねたさつきがスピーカーにして助け船を出した。

さつき『はいはい、お電話代わりましたよ。なくに女の子をいじめ

てるのかなあ？傍から聞いてると…お前さんの言い方はあまりにも
理路整然とし過ぎてて警察の職務質問みたいだぞ？」

高橋 涼介「いや、そんなつもりは無かったんだが…すまん。それ
だけこっちも緊迫した状態って事さ。美奈子さんにも謝つといてく
れよ。」

さつき『いや、スピーカーホンだから聞こえてるだろ？直接謝った
方が良いと思うぞ？』

美奈子「いや別に…ちよつと驚いちゃっただけど…そこまで謝罪が
どうかと言つて無いし…」

高橋 涼介「そうですか。それなら良かった。お詫びに今度高崎で
見つけた極上スイーツご馳走しますよ。」

美奈子「あたしつてモノで釣れると思われてるのかなあ…結構その
辺はしっかりしてるよ？」

高橋 涼介「イヤイヤイヤ…参ったな。そんなつもりでは決してな
いですよ？」

美奈子「フフフ…冗談ですよ。ま、今度そのスイーツ紹介してくだ
さいな。ま、あと20分くらいで到着すると思いますから…」

高橋 涼介「解りました。では後程。さつき！峠の入り口辺りに怪
しいのが居たら気を付けてくれな…」

さつき『はいよ、了解。あ、美奈子、沙雪に連絡してこの事伝えて。』
美奈子「りよくかいです。」

(※——ここからはside changeさつき↓Noside
(作者ナレーション)で進行します——)

美奈子は沙雪に取り敢えず高橋 涼介から伝えられたプロジェク
トDのWエースが妨害に遭ったのか他の要因かはわからないけど、と
にかく今ピンチらしい事と、もしかしたら車借りて上りか下り…どっ
ちか相手にしなきゃいけないかもしれない事と…下の辺りに厄
介な連中が潜んでるかもしれない事などを伝えている…。

沙雪も真子ちゃんも気を引き締めて向かうようだ。

さつき『さて…もうそろそろかな…さつきから変な胸騒ぎがするんだよね…。』

美奈子「え”っ…マジで？あんたの予感…ほぼ100%で当たるヤツじゃん…」

さつき『実はここに出かける時…もう予感してた。』

美奈子「はあく…何でそう言う事初めに言っておかないかなあ…」

やがて峠らしい道に変わっていく…ちよつと走るとオイルが撒かれたのを洗剤で洗ったような真新しいシミがあちこちにできている…事態は思ってたより緊迫してた…；；；

さつき『たぶんエンジンオイルとかの廃油でも撒かれて滑って事故ったんだろうな…あいつらは運転が下手ではないからギリギリ本人は掠り傷で済む程度かもしれないが…車のダメージが心配だなあ。』

美奈子「完全に潰しに来てるね…プロジェクトDを。予定変更しようとするれば逃げたってワ〜ワ〜言うんだよ…そういうヤツらって。」
いつになく美奈子の怒りと沸き上がる様な闘志がメラメラと燃えているのがあるありと解る。

多分この“殺気”にも似た。ピリピリした空気…Impact Blueの2人やそこかしこに隠れてると思われる妨害部隊にもヒシヒシと伝わってるんじゃないだろうか…。

ま、ぼちぼち俺も殺気MAXで行ってみようかな…”銀色の悪魔”の名前の由来…こいつらに叩き込んでやろうかな…っつと。

路面の感触を確かめつつ左右に道幅いっぱい車体を揺すってレース直前のタイヤを暖めるウォームアップさながらに上って路面の状態を確かめる。コースは頭に入ってるので路面状況を追加すれば俺のデータは出来上がる。

真子「ん!?!凄いな…」

沙雪「どしたの？」

真子「沙雪には伝わらない？あの2人…マジで怒ってるよ。本気でこの地元の連中…叩き潰すつもりだわ。さつきさんが往復出るっ
て言っても…美奈子どっちかやるって聞かないと思う。」

そしたら…沙雪、美奈子に無条件で車貸してあげて。美奈子ならこの車を絶対壊す事は無いよ。凄…これが“悪魔”と“幽霊”のマジな闘気。痛い位ビリビリ来るよ…」

超・マジモード…暗殺者（アサシン）ばりの殺気全面開放!!

さつきと美奈子の殺気漲る闘気を解放した事で感じ取ったのは真子だけじゃなく…

峠に居る妨害工作の連中すべてが首にナイフでも突きつけられたような感覚で…

背筋がゾクゾクして身体がこわばり身動きが出来ない。“下手に動けば皆殺し”…

それ位の殺気が峠全体を包み込んだ。

相手チームの妨害部隊の連中「「な、何なんだ…こいつらが走っていただけなのに…ちよつとでも体を動かさそうとすれば首を搔っ捌いて殺される気がする!!マジでヤベえ!怖ええええっ!!」」

そしてこの異様な空気を頂上に居る高橋 涼介やドライバー2人にメカニツクの連中、サポートの連中に至るまで感じ取っていた。

高橋 啓介「あ、兄貴…この空気…どう考えてもヤバくないか?マジでここの峠の連中木っ端微塵に吹き飛びそうな勢いを感じるぜえ?」

拓海「この異様な殺気に似た空気に…山が全力で反応してるみたい…何なんだこれ…」

高橋 涼介「すげえな…これほどのプレッシャーは今までに感じた事が無い…これがマジもマジ…全力を解放した悪魔と幽霊（ゴースト）の闘気…俺が相手ならビビって出て来れないかも知れないな。」

高橋 啓介「じよ、冗談だろ? 兄貴がビビって走りたくなくなるなんて…」

高橋 涼介「俺でもいささか気が引けるくらいの圧を感じるぞ。きつと…並の精神の奴らじゃ耐えられずに廃人に追い込まれるぞ。呆気無くこの勝負はカタが付く…しかも完膚無きまでに…相手が立

ち上がれない位の精神的なダメージをもたらしてな…」

ボボボボボ…ボウアアアアア!! フバンツ! ギュキャキャツ!
キョオオオオオ…!!

頂上まで上ると…高橋 涼介達の集合してこつちを見てるのが解る。さつきは運転席側の窓を開ける。

さつき『お待たせ。喧嘩売られたんだな? その売られた喧嘩…俺が買ってやるよ。どこの大馬鹿だ? ちよつとお仕置きが必要らしいな。(ニヤリ)』

美奈子「電話貰うまで応援に行く事しか考えてなかったんですけど、悪魔と幽霊(ゴースト)を敵に回したらどうなるか…見せつけるのも良いかも知れませんかえ…フフフ。(真っ黒い笑みを浮かべる)」
真子、沙雪、高橋 涼介、高橋 啓介、拓海 「……ま、マジでこの2人敵に回したくないわ/敵に回したら…命の保証は無い。/これほどだとは…傍に居ると更に凄みを感じる! ゾクゾクする程の鬨気だな/こいつは…マジで地雷だ/やべえ…これこそ悪魔の微笑み。その先に待ってる物は地獄絵図。」「……」

※プロジエクトDの他のメンバーも同じ事を思っていた様子。

事故の様子を聞いてみると…片側2車線あるこの峠…昼間は結構車の往来も多い。

夕方日が沈むと急速に暗くなるこの街灯もない峠道。

そこにドラム缶に入っていたと思われる廃油(洗浄してる印象はエンジンオイルより硬いオイルだったと言うからデフとか機械油の90とか120と言われる船舶とかダンプとかで使う様な固いものだろう)を何本か転がしてあったのに乗り上げたタンクローリーが横転つぶれたドラム缶から流れ出た廃油にタンクローリーが積んでいた重油が流れ、

しばらく後を走っていた高橋 啓介がまずスピンしながらタンクローリーに突っ込み、

それを避けようとした拓海。ハンドルを切ってもスピンしながら

崖に突っ込み大破したという…その後、警察や消防などが出ても警察すらスピンして事故になった。

そんな大騒ぎがあったせいでバトルどころか練習すらできる状態ではなくなってしまったという。

そう言えば迫り来る崖の木々の一部がごつそり抜き取られて焼けた様な箇所があった。

FDも86もローダーで工場に運んでまだ部品が揃わず手付かずだと言う。

聞いていたさつきは…S15を発車させ、美奈子を乗せたまま一気に見えなくなつた。

高橋 啓介「あ、兄貴…あいつは一体…。」

高橋 涼介「この状況でも最速で走れるラインを美奈子さんに教えに行つたんだと思う。どっちを任されても大丈夫なように…な。きつとさつきが止めた所で美奈子さんの怒りが収まる事は無い。ならやらせてみようって事なんだろう。」

沙雪「いやでもそれって、この練習中にまた妨害があるかも知れないって事じゃ…」

高橋 涼介「あの2人の殺気にも似た鬨気が妨害部隊を足止めするだろう…まるで首元にナイフを突きつけられるような殺気だからな。暗殺者（アサシン）ばりの殺気だよ…あれは。」

○○○峠にこだまする怒りの咆哮…ブオオオオオ!!ギユキヤキヤキヤ!!グオオオオオオオオオオ!!ブウアアアンツ!ギユキヤキヤツ!ギョリギョリツ!!!

1往復終えて帰ってきた2人…すぐさま美奈子は無言で沙雪のシルエイティに乗り換えそのままS15を追って消えていく。

高橋 啓介「こ、怖えええぞ…マジで、悪魔か阿修羅みてえな顔してたぞ…無言で出て行く様も…本気のレーサーでもあんな殺気感じ

ねえだろ…」

真子「あたしは約1年レースやってるけど…あんな殺気は感じた事は無いわ。本当に恐ろしい。敵にしたくないわ…永久に。」

その後、5周位しただろうか…それだけで2人とも今すぐ行けると言う。

(集中心力がハンパ無えこの2人。)

5周したうち後半3週はほぼ全開でしかもタイムが揃ってる…高橋 涼介はタイムを見て驚き、拓海と弟を呼んでデータをさせる。

高橋 涼介「これを見てみる…俺がよくタイムを揃える練習しろって言ってるのはこういう感じだ。」

高橋 啓介「ん？ゲツ！なんじゃこりや…このタイムでしかも揃えるってタイヤの使い方どうなってるんだ？」

拓海「ええ!!!タイムアタックでもこんなタイム出せない位ハイレベルなタイムで揃えるってタイヤがタレてくるのも関係ないって…」

高橋 涼介「これだけ出来たらすごいだろうな。しかもさつきだけじゃなく、あの美奈子さんもだ。脱帽だよ、ここまでやられたら…な。」

沙雪&真子「すみません。あの…美奈子のタイムと違ってどうなんでしょう？」

高橋 涼介「あの2人ともに言える事だが…ま、一言で言ってしまうと神業だな。3週目から5週目まで全開にしてるタイムが誤差1秒以内で揃ってるんだ。」

(タイムアタックの記録をメモした紙を真子と沙雪の方に差し出す涼介と受け取ってしげしげと見入る真子と沙雪。)

沙雪&真子「「ええっ!?誤差1秒以内…ですか?信じられない…そんなに正確にできるものなんですね…」」

2台で奥に停めて何やら話してる姿を見ながら5人(高橋 涼介、啓介、拓海、沙雪、真子)の“ははは…”と信じられないと言った感じの乾いた笑いが漏れた。

※一方奥で話してる2人の会話をお聞きください…

美奈子「あの下りの4つ目の右コーナー抜けた時にちよこつと苦しい気なラインになるのってやっぱりオイルの影響を考えて？」

さつき『ああ…ホントならあと30Cm外側を狙いたいところだけどな…あれ以上外側はまだ見た感じダメだろうな。4つ目でオイルが付いたらそこから先のペースが上げられない。それならコーナー1つを犠牲にしても他でペースを上げた方が良く思うぞ。逆に上りのスタートして3つ目のコーナーを抜けてストレートに入る瞬間のくぼみ…ここにも注意だぞ。速度が出る分、足回りが折れる可能性とタイヤがバーストする可能性がある。』

美奈子「了解。とりあえず、あと気にしなきゃいけないのは殺気にも負けずに妨害工作をかけてきたときの対処…だよな。かなり厄介だよな。ただ崖の上からドラム缶を落として来るか、「石か岩とかを飛ばしてくるか…：火炎瓶で焼き討ちか釘とかでパンクを狙ってくるか…：相手の車からオイル缶投げつけられたらアウトだし…」

さつき『ま、そこまで行っちゃうとMAXの殺気を放しつつ…警戒していく事だろうな。今回のミッションは勝つだけじゃない。完膚無きまでに叩き潰すだからな…。』

戻ってきてまだ時間があるので…軽くS15とシルエイティをプロジェクトDのメカニックの人に見てもらいながら飲み物を飲んで待っていた。

美奈子は真子&沙雪と何やら話していた。

高橋 涼介「ん？もう10分前なのに一向に現れる気配が無いな。」

高橋 啓介「兄貴…もしかしてあの2人の殺気で逃げだしたのか？」

拓海「何か…いやな胸騒ぎがしますね。」

さつき『もし来なかったら俺たちに妨害工作や事故の責任を押し付ける気なのかもしれないぞ？サポート隊とメカニックはメンテが終わり次第撤収だな。』

高橋 涼介「俺は今回の妨害工作にあった事をHPに乗せる原稿を作つてあるんだが…今後こういう事態が逆に増えて行きそうだな…掲載するか悩んでいるんだ。」

さつき『なら逆に何も無かつたかのように沈黙を通すのも手じゃないか？煽つてきた時に尻尾を掴んで芋蔓式に引つ張り出すつて事にして。あ、妨害工作をこつちに追い被されないように、敵の妨害工作チームの動きと警察の動向…念のため探り入れた方が良いでしょう。』

高橋 涼介「それはケンタとタイム計測チームに今、見させている。」

そんな話をしていると涼介にケンタから電話が…

ケンタ「あ、えつと涼介さんですか？こちらケンタですけど…どうやら妨害工作チームは崖の上から落とすドラム缶とかを置いたまま逃げだしたようですね。この分だと警察にタレコミの電話とかしてこつちに押し付けて来るかも。つて事は警察が来るかも知れません。」

高橋 涼介「フツ…なるほどな。じゃあ…メカニック班と計測を含めたサポート班はドライバー2人と…ImpactBlueの2人を含めて反対側から降りて向こう側にファミレスがあつたはずだ。そこまで取り敢えず撤収してくれ。」

高橋 啓介「ちよつと待つてくれ…兄貴とさつきさんと美奈子さんはどうするんだ？下手したら逃げ遅れるんだぜ？」

高橋 涼介「俺は…このチームの指揮官だ。ギリギリまで居座るさ。」

さつき『それに、俺と美奈子は今回の代走要員だ。残るのは当たり前だろ？少なくとも警察に追い付かれるようなウデはしてないと思うがな？逃げる時には俺が乗せて来りや良いだろう？』

美奈子「少なくともさつきとあたしはさしずめ…」プロジェクトDの暗殺部隊（アサシン）”だからねえ…誰かさんに悪魔か阿修羅みたいつて言われてたもんねえ？」

高橋 啓介「い、いや…その…すみません。でもそれ位に殺気立ってたもんで…言い過ぎました。」

美奈子「いや怒って無いから。神奈川に居た時から言われ続けてたことだしね…さっきの通り名の語源もここからだし。」

(※ここからNo side (≡第3者目線or作者ナレーションとも言う)で進行します—)

取り敢えず現場にはさつきと美奈子、それに高橋 涼介だけが残り…涼介が相手側の代表者に電話をかける…(通話記録を保存するため録音機能をONにしている。)

：鳴っているが出ない。数回繰り返すと電源が切れた。意図的電源をに切ったと見て良いだろう。

美奈子はその様子を動画で撮影し…証拠として残した上で俺達も撤収することに…。

その時ケンタから高橋 涼介に電話が掛かってきた。

ピリリリリリリr…ピツ…

高橋 涼介「ケンタか、どうした?」

ケンタ「今こっちは反対側に降りて来たんですけど…警察車両が7、8台そちらに向かって上がっていききました!!逆の方に降りて行ってください!」

高橋 涼介「わかった、ありがとな…。」ピツ…

高橋 涼介「…って言う事だから俺達も降りて行こうか。さつき、頼んだぜ。」

さつきと美奈子は頷いて2台で降りていく。さっきの最速ラインを使って…

高橋 涼介はその様子を観察している様にも見える。

下り切って反対側に降りて行ったメンバーと合流する為、若干遠くなるが住宅街を抜ける道を選択。

すると反対車線を凄いい勢いで警察車両が走っていくのが見えた。

間一髪とは正にこの事。

20分後に待ち合わせのファミレスに到着し、ようやく合流できた。

ゆっくりしたい所だが、油断できないので美奈子は車を返却してそのまま、シルエイティの後部座席に座り、運転は真子にスイッチ。真子、沙雪、美奈子の仲良し3人組でシルエイティに、S15に高橋涼介とさつきがそのまま乗車。サポート隊はそれぞれワンボックスに乗り込み高崎を目指していく事に。地元でゆっくり飯でも…という事になった。

その間に高橋 涼介は手帳を取り出し、ノートPCの情報をメモしているようだ。

さつき心の声『(ん?メモ?!ああ…美奈子に教えると言ってたsw e e t s 情報かな。マメな男だねえ…忘れてなかったんだ…)』

高橋 涼介「ん?何かしたか?」

さつき『今、手帳に書いてるそれ…もしかして美奈子に渡すsw e e t s の情報かと思ってるね?忘れて無かったんだ…マメな事してるねえ…って思ったのさ。』

高橋 涼介「まあな…今回はさつきだけじゃなく美奈子さんも引張り出してしまったからな…約束は果たさないといけないだろう?」
と言つてボールペンを走らせ住所やおすすめのメニュー、それに価格など書き込んでいるようだ。

高崎のこの前さつきと高橋 涼介が話したファミレスで朝食を食べ：美奈子に約束通りsw e e t s の情報とさつきに2人分の日当を渡した。

(※)——side change ここからはさつきsideで進めます——)

高橋 涼介が渡してきた封筒の中身をこっそり見て驚いた。イヤイヤ、2人分とは言えだよ…5万はさすがに多くね?。

さつき『おいおいちよつと待て…いくらなんでも2人分でも額が多すぎねえか?』

高橋 涼介「とりあえず急遽呼んだからな…緊急出動手当と、危険手当とが追加されると思ってた。」

美奈子「へっ?…あ!!! (さつきの慌てっぷりに封筒の中身を見て…驚いた) イヤイヤイヤ、それでも多いってば…今日1日って言っても実質2時間位だよ?いくらなんでも高額すぎませんか?」

高橋 涼介「俺からしたらそれ位…いや、ホントならもつと2人の価値はあると思ってる…また何か緊急事態が勃発した時にはお願いしなくちゃいけないるんだ。」

イヤな役回りをさせる分上乘せは当たり前だろ?取っついてくれ。じゃないとこれから頼みにくくなる。」

さつき、美奈子『「いやあ…でも…良いのか?／良いの?ホントに?」』

高橋 涼介に押し切られる形で受け取る事になった。で、シルエイティを借りた分のガソリン代として今回の往復の分はここから出すことにした。

その後美奈子達はGetしたsweets情報を元に3人で行ってみる話をしている。

俺は拓海と高橋 啓介と車の修理の話をしていた。

さつき『それにしても2人とも…災難だったな。今回みたいな事はそうそうないとは思うけど、全く無い訳じゃないと思うからなあ…気を引き締めて…って言ったって不可抗力ってもんがあるからなあ。』

拓海「親父にグーで殴られる覚悟はできてるんですけどね…」

さつき『イヤイヤイヤ、今回の事は俺も一緒に行って話してやるって。これ以上身体にも心にもダメージ負う事無いと思うけど?それに…86もだけどFDだってあれって確か限定物だったろ?黄色のFDって…』

高橋 啓介「まあ…悔しいけど、今回は俺のウデのせいもあるしな。周りが見えてなかったって反省もある。」

さつき『まあ…例えレーサーでも事故はつきものだし…あんな妨害受けたら避けられないって言うのもあると思うぜ？俺がその場で巻き込まれて避けられたか…って聞かれたら避けられた自信は無いな。』

高橋 啓介、拓海「さつきさん…それ、フォローになつてねえくし！／なつて無いっす…」

さつき『それにしても…しばらく遠征が延期になつちやつたなあ？秋も終わりになると箱根やヤビツも凍るぞ？地元だからよく解つてるつもりだから助言させてもらうけど…』

高橋 啓介「ウチの兄貴のタイムリミットも迫つてるしなあ…年を跨ぐ訳にもいかねえし。」

さつき『そく言えば、おたくの兄ちゃんのリミットっていつまでだっけ？』

高橋 啓介「確か年明けたら卒論と国家試験が…とか言つてた気がするけどな…」

さつき『車が直つて来るまで…普通に考えて2週間半〜3週間位掛かるだろう…？9月終わって10月…2戦やるにや…セツティングもあるからなあ…ホントにギリ間に合うかどうかだぞ…』

最悪、神奈川は暗殺部隊で行っちゃうか？』

高橋 啓介、拓海「そ、それじゃあ今までの苦労が…身も蓋もね〜じゃんっ！／無いっすよお…」

さつき『でも、修理の状況によつてはそれもあり得るって事も覚悟しておかなきゃいけないぞ？』

高橋 啓介、拓海「!!!…そ、それは解つてるつもりだけどよお…／ここまで来て…何でこんな事になるんだか。」

~~~~~

ここで解散となつて後日改めて話し合う事になった。

数日後、いつもの仲良し3人組（真子、沙雪、美奈子）は高橋 涼介に教えられた sweets のお店に顔を出していた：ここはケーキバイキングが人気のお店。

沙雪「で？白いFCの王子様のコメントは？」

美奈子「えつとねえ：（渡されたメモを開く）フルーツ系のタルトも甘さが上品でおいしい。でも、甘いものが好きならチョコレート系のガトーショコラやザツハトルテ、またはレアチーズとかずっしり重みのあるケーキも推せる：って書いてあるよ？」

真子「何だろ：お城での優雅なティータイムの絵が浮かんでしまうんだけど：フランス貴族とか：ベルバラ辺りの貴族の服装で：ダーズリンティーか何か飲みながら談笑してる雰囲気だわ。」

沙雪、美奈子「ああ、納得。ああいう服装でお城の中に居ても：違和感感じないわ、；；；；；」

真子「じゃあ：あたしはフルーツタルト行ってみようかな：」

沙雪「真子がフルーツタルトならあたしはザツハトルテ行ってみるわ。」

美奈子「じゃ、あたしはレアチーズから攻めていきますか。」

90分後：店から出てきた3人。

沙雪「うくん、思いつきり堪能したわねえ。」

真子「こ、今度：池谷さん連れて来ようかな。」

美奈子「そしたらさつきとかも連れて来るようじゃない？結構ああ見えてケーキ好きよ？」

沙雪「そくなのよね。初めて確氷をダーリンが走った日：普通にバイパス店で美奈子が休憩中だったけど：とか言ってチョコレートケーキとチーズケーキを笑顔で買ってたわよ？よっほど好きよね：」



ケーキ屋を訪れる常連さんが…

最近いつも閉店間際にやってくる若い男性が居る。

パートのおばちゃん達から“こんちゃん”と呼ばれているこの若者はいつも決まってモンブランとチョコレートケーキをお買い上げして風のように去っていく。

パートのおばちゃん達に聞いてみると1か月以上、定休日以外は欠かさず毎日来ているのだと言う。

何でおばちゃんたちが彼を“こんちゃんと呼んでいるのか：それは前に学生証を落として行って、名前が近藤勇一（こんどうゆういち）だから愛称として“こんちゃん”になったのだと言う…

聞くとところによると群馬大学の4年生なんだとか。（そう言えば群馬大学ってどこかで聞いたことあるなあ…って思ったら高橋涼介と同じ大学ね^^;;;)

なんか最近…あたしが接客すると挙動がおかしい…何か顔を真っ赤にして明らかにキョドっている…

理由はわからないけどことのほか急いで帰ってしまう…不思議だなあ…とあってあたしは去っていく後姿を見送っていた。

（ライライ、気が付いてやれよ。可哀想に…こんちゃんドンマイ^^;;;;作者注。）

ある日、定休日以外毎日買いに来てた“こんちゃん”が来ない…と思ったら閉店間際に滑り込んできて…レジを閉める関係であたしが先に買って確保しておいたケーキを渡し…

息が整っていないかったので駅まで送る事に。

美奈子「こんちゃんって…家はどの辺なの？」

と走り出してすぐの信号に引掛かった時に聞いてみたら

「こんちゃん「えつと…位置的には渋川と伊香保の境に近いんですけど、…伊香保の温泉街に向かうバス通り沿いにEssoのガソリンスタンドがあるの解りますかねえ？あの近くですけどね。」

美奈子「ん？伊香保の温泉街に向かうバス通り沿いのEssoのスタンド…あ、それうちの従兄が務めてるところじゃないかなあ？スタン

ドにどうせガソリン入れに行くし、そこまで乗せてつちやうわね、  
」

「こんにちは「えっ!?えっ!?そうなんですか? (意外な接点で驚いてる) ウチの親も親戚もあのスタンドでお世話になってるんですよ。」

美奈子「へえ、そうなんだ、じゃあ、うちの従兄とも話したことあるかもねえ?」

その言葉にハツとするこんにちは…しかもスタンドに着いたら居ましたよ、こんにちはの親戚が。何とこんにちはの親戚はいつも池谷君と居る健二君だった。世間つて狭いね、；；；；

その後、あたしがNOTEとS13を交換する直前に渋谷駅前オープンする事になった会社直営カフェの店長に抜擢された。

(その辺の件は3rd Stageの”それぞれの恋愛事情: 4 | 4

(ある意味これも…恋愛事情か!?)”を参照してね、；；；；)

(たぶん…と言うか絶対、沙雪のゴリ押しがあつたのは容易に想像つくけど、；；；；)

この前のケーキの味に感化されたのか、カフェで考案したケーキを店舗でも売るとか、

大胆な行動に出始めた。こんにちはは当然のように店舗でモンブランを買うよりカフェで食べる様になり…

チョコレートケーキだけテイクアウトするようになった。それ以降、スタンドとかでもよく会うようになってこんにちはも慣れてきたのが話しかけてくれるようになった。

まあ…お友達の増えるのは良い事だよね。うん。

(※補足…3rd Stageでは恋愛エピソードを凝縮して書いてちゃったので時間的な流れが解りにくいと思うので整理します。美奈子がまだ店舗で接客してる頃、こんにちはと知り合う。↓この後にレーザーの真子ちゃんの事故↓手術・長期入院があつて…

プロジェクトDが関東を制して解散してから3rd Stageの河原でBBQのお話につながっていきます。ちなみにBBQの開催された頃は真子ちゃんが退院してからです…翌年の春先になりますね。(ライライ、こんにちは卒業式は?)って思われるか

も知れませんが…卒論を提出し損ねてもう1年になってしまったと言おう…

悲しいエピソードも付け加えておきます…(チーン。)

(※)こんにちはごめん！留年させちゃった大学5年生頑張つてね…  
…；；；読んでてつながらなくなっけ？と思つた方、そういう流れですの  
でご理解ください。By 作者)

※ここではこんにちはの美奈子に寄せる…ささやかな妄想を(※夢  
見る位許してあげてくれよおっつて位の可愛い妄想を)ご覧ください  
い。

(※)——ここからはNo side(≡作者のナレーション目線)で  
お送りします——)

ある日…翌日が定休日なのを知っていたこんにちは…学校は午後  
からなのでまずはカフェで美奈子の入れてくれたアイスコーヒート  
モンブランを堪能しつつ、もう1つのお目当てである

“80sのPPPSの流れる店内で働く美奈子”を見て癒されて  
る…授業が終わってから帰りがけに久しぶりに元々美奈子が働いて  
たバイパス店の店舗に寄り道して、帰って楽しむ用にモンブランを2  
つと母親様にチョコレートケーキを買った。

パートのおばちゃん達には「あら？なくにい？こんにちは最近全然  
顔を出さないから小長井さんを追いかけてカフェに行っちゃったつ  
て話してたのよお？」

などとはやし立てられ…オドオドしながら店を出る。100%当  
たつてる訳じゃないけどほぼ正解だから言い返すことができなかつ  
たこんにちは…。

一応、作者が彼の為にフォローさせていただくと、今時珍しい位に  
純粋な子なんです。

家に帰るとお母さんにチョコレートケーキを渡し、自分はモンブラ

ンを皿に移してラップで包んで冷蔵庫に入れる。

部屋に入ると前に店舗に居た時に美奈子に頼んで一緒に撮ってもらった2shot写真を

カメラのキ○ムラでプリントアウトして写真盾に入れて机の上に飾っている。

写真盾を見ながら：

美奈子さん「こんにちは、ほら、これおいしいよ？あ〜〜〜ん♪ね？おいしいでしょう？」なんてにっこり微笑んでくれて…と頭の中でメルヘンチックな展開が再生されている…。

何かもう中学生の淡い初恋を見てるかのような…（コホンツ：何度も言いますが、

彼はそれだけ純粋なんです。）

卒業論文のネタと探すのに、ノートPCの電源を入れてネットを開くけど…つつい美奈子の顔を思い浮かべて現実逃避してしまう…かなりの重傷かも知れない。

悶々としてるこんにちは…最近、ホント心ここに在らずって言うか：階段で躓いてコケちゃったり、電車で降りる駅を間違えて1つ前で降りちゃったり…学校祭の準備にも身が入らず、仲間たちからも心配されてしまう位…なのに美奈子を目の前にしてしまう…

モジモジしてモンブランのケーキセットしか頼めない。

ほとんどビョーキのこんにちはを健二君は心配して池谷君に相談していた。

健二「お〜い、池谷…最近いとこのユーイチの様子がおかしいんだよ。」

池谷「え？あのこんにちはが？どうおかしいんだよ？」

健二「何かさあ…心ここに在らずって言うか…心をどつかに置き忘れちゃってるみたい…行動と頭で考えてる事が違うって言うか…」

池谷「何だそりや？かなり重症な気がするな…恋煩いかな…健二、お前…心当たりは無いのかよ？」

健二「う〜ん…全然見当がつかない…；；；大学に気になる子でも居るのかなあ？」

樹「いやだなあ。健二先輩、男はみんな女が好きなんですよ…フツ」  
勘違いな男が登場…^^;;;

池谷「あのなあ…樹、お前と違ってまだこんちゃんは純粋なんだよ…遠くから見ても一方的に好きて…ポクとして…それだけでも良いって世界なんだよ^^…乙女チックって言うか中学生みたいて言うか…」

健二「うんうん、言ってる。小学生の書く絵日記の内容をそのまま大きくしちやっような奴だからなあ…オシヤレとかにも興味ないし。」

池谷「でも…一体こんちゃんを虜にしてる女の子って一体…誰なんだ？」

健二「それが解らなきや、対策の立てようもない…か。困ったなあ。」

ブオンツッ！フバアアアアアアアアアアアアッ！ギユキヤキャツ！  
グオオオオオオ！ブオンツッ！ブオオ〜〜ンツッ！（シフトダウンしてスタンドに入ってくるS13）

美奈子「やつほ〜♪ハイオク満タン、現金で。あ、会員カード渡しとくね♪よろしくお願いね〜^^」

池谷「いらっしやいませえ…あ、美奈子さん！久しぶりですねえ。」  
美奈子「やつぱりS13はNAでもパワーあるねえ…普通に乗ってストレス感じないわ。NOTEと違って圧倒的に楽だわあ。」

健二「美奈子さん、ご無沙汰してます^^元気でした？」

美奈子「うん、あたしは全然元気だよ？」

健二「あつ、そうだ…美奈子さんにも聞いてみるか…美奈子さん、最近…いとこのユーイチの事で何か知ってる情報無い？」

美奈子「ん？健二君のいとこのユーイチ君？はて…誰だっけ？」

池谷「えつと…ユーイチじゃ解かんないですよね。こんちゃんの事ですよお。」

美奈子「ああ…こんちゃん？こんちゃんがどうかしたの？」

健二「最近おかしいんですよ…心ここに在らずって言うか…物は無くす、段差を踏み外して怪我するし…」

美奈子「うわお…結構重症だねえ。^^;;;心配だわ」

こんちゃんの事を本気で心配してる健二、池谷、美奈子…でもその原因の当事者だと微塵も感じてない美奈子って一体…

美奈子「でもさあ…こんちゃんが挙動おかしいのって最初っからだっただけであ…」

健二「そんなにおかしいの？で、どんな風に？」

美奈子「何か顔を真っ赤にして明らかにキョドっているし…理由は解らないけど事の他急いで帰っちゃうから…好きな女の子に貢いでるのかなあ。まあ…バスに乗り遅れるっていうのもあるのかも知れないけどさ。でも、不思議な子だなあ…と思ってあたしは去っていく後姿を見送っていたんだけどね。」

池谷「んっ？もしかしてそれってさあ…原因が美奈子さんなんじゃ…」

美奈子「へっ？あ、あたし？何で？あたしが働きます前から店に毎日通って買いに来てたんだよ？さすがに違うでしょう…あたしが働き始めてからそういう状態ならその可能性も出て来るでしょうけども…」

健二「ん…美奈子さんじゃないとすると…一体誰が…？」

※一同の謎が逆に深まってしまったみたいですね^^;;;(作者注。)

美奈子「最近、こんちゃん同窓会に出席したりした？そうすると前好きだった子と再会しちゃってまた火が付いちちゃったとか…」

健二「ん？最近同窓会とか開いたって聞いてないなあ。」

美奈子「あ、池谷君、コピー用紙1枚貰っていい？ちよつと整理してみようよ…」

池谷「あ、はいはい。お待ちせです。コピー用紙と蛍光ペンとボールペンね。」

美奈子「サンキュ。えつと…まず気になる女の子と出会う可能性を書いていくね…」

- ・大学のサークルとかゼミ
- ・行き帰りのバスや電車の中で見かける
- ・ケーキ屋（＝美奈子？）
- ・趣味や生活の場で出会う店員さん（本屋とかコンビニとか：釣具屋さんとか釣りに来てる人の可能性もある）
- ・SNS（または携帯アプリのゲームなど）に入ってるならそこでのつながりのある人：

美奈子「まあ：大体こんな感じかなあ？さて：でこの中からまず可能性の低い条件を消してみる：と。まずケーキ屋って言うかあたしの可能性はさつき言った理由からも可能性は低いと思うんだよね：（赤いペンで消す。）ねえ？こんちゃんってTwitterとかFacebookとかインスタとかやってる？」

池谷「ん～そんなに自分から発信するようなタイプじゃないんだよなあ：」

健二「携帯でゲームって言うのもやってるのを見たことないんだよなあ：」

美奈子「ん～じゃあ、SNS、ネット関連は削除：つと。」（赤ペンで消していく。）

池谷「そうすると残るのは大学の校内の関係かその道中：またはこんちゃんが出入りしてる店の店員さんとか常連客が怪しくなる：か。」

健二「あいつの出入りしてる店って言ったたら：このスタンドから番号を2つ先に行ったセーオンか、駅の横のセオンとか。・・・〇〇堂書店にジョーサンのファミレス：隣のマツ〇トキヨシに敢えて付け加えれば美奈子さんの所のケーキ屋位：か？」

美奈子「じゃあ：そこにこんちゃんが好きそうな感じの女の子が居れば：って感じかなあ。これでだいぶ枠は狭まったんじゃない？」

健二「ホントはもう少し絞り込みたいけど：あとは尾行か。」

美奈子「うっそお、そこまでするの？マジで？プライバシーとか無さすぎじゃね？そこまではさすがにやり過ぎだと思っただけだねえ：」

池谷「後はもうド直球でこんちゃんに問い詰めるか：」

美奈子「んゝまあ…気になるだろうけど、ほどほどにしてあげてね。」

そう言って帰っていった美奈子…スタンドでは相変わらず池谷君と健二君が樹を巻き込んで何やら作戦会議が行われていたようだ…。

(※この後…樹が上がってしまい、残っていた池谷と健二。そこへ知らずに家の原付のガソリンを入れに来たこんちゃんはこの2人に警察の取り調べも真っ青な厳しい追及に対してついに口を割り…美奈子に片思いという事がばれてしまう…。

あゝあ。この2人に知られちゃって良かったのか悪かったのか…マイペースなこんちゃんは今後周りに引きずられるように巻き込まれて行っちゃうんですよねえ…南無。(チーン)



取り敢えずその後のプロジェクトDはというと…

タイムリミットから逆算した日の翌日…さつきはNOTEで拓海の実家を訪れていた。

営業時間が始まって間もない頃を狙う。今日は平日…拓海は昨日の夜から仕事で九州に物を運んでいると言う。人気のない店の前に立つ…そして入り口の扉をカラカラと…横にスライドさせて奥に向かつてご挨拶。

さつき『おはようございます！油揚げと絹ごし1丁ください！』

文太「はいよろちよつと待っていてください。…おつ、珍しいな。銀色の悪魔が買いに来てくれるなんて…」

さつき『へへへ。噂には聞いてたんですけどね。豆腐と油揚げの味噌汁が好きなもんでね？どうせならおいしいモノ食べたいしね。』

文太「まあ…ホテルにウチは卸してたりするから味には自信…あるけどな。」

さつき『なら間違いないでしょうっていう前提で来てます。(ニツコリ)』

文太「言おうとしてる事も読まれちゃってるのかよ…敵わんな。それに…この前の遠征先の○○○峠であいつが事故に巻き込まれたこと…もあつてだろ？そんな予感はしてたけどな。」

さつき『いやあ、俺も驚きましたよ。早上がりの日だったんで美奈子と碓氷のImpactBlueの2人を引き連れて応援に行く途中の八王子の高速の出口にそろそろ…って所で高橋 涼介から電話がかかってきて。でも、まあ2人とも、ウデを持ってから本人は掠り傷程度で済んでるだろうけど…って正直思いましたけど、車は…俺がああ後工場に見に行った感じではほぼ全損でもおかしくありません。それをホワイトボーディーから起こそうとしてるんですから…全くすげえつすよあの男…高橋 涼介ってヤツは。ただFDもだけど…86のパーツのストックがほぼ欠品らしくてね。俺が思いついた京都の86専門店に連絡してみたんですけど、どうしても3つパーツが揃わなくてね。その入荷が正直1か月半以上かかるかもつ

て言われたんで…。」

文太「いや…正直それを聞いて驚いてたんだ…程度の良い中古のフレームに載せ替えるんだろう…位にしか思ってたのにホイットボディーから作るなんてな。時間もないだろうに。あいつは医大生だろ？いくら金があつても国家試験や卒業論文つてもんが待つてるはずだ…。下手すりや冬越しちまうぞ…つてな。そしたら部品の手配に向けて頑張つてる人間が1人居るつてな。その行動力には恐れ入ったぜ。」

さつき『いやいや、俺は裏方ですからね…得意だし。』

文太「いくら得意でも、86の部品作つてた金型屋を割り出して強引に頼み込んで予備も含めて作つてもらうなんて…どっからその熱意が出て来るんだ？異常だぞ？」

さつき『いやあ、今、86の人気は拓海君の影響でまた中古車市場で盛り返しつつあるんですよ。だからね…部品を再生産してくれれば事故は起これば部品が必要になる、そうすればお宅の工場も儲かる。絶対損はさせない！つて言つたら作つてくれました。』

文太「策士だな。よくそんな殺し文句を思いついたもんだぜ。」

さつき『伊達に仕入れとかの交渉してきてませんつて。殺し文句で落とすのは常套手段でしょう？ま、そのお陰で86のホワイトボディーで3台分、ストックしときましたから。プロジェクトDが終わつても長く乗つて行けますよ。大事な86です、俺らで守らなくちゃね^^ 錆とかにはこの時代の車は強くないですから組み上げる時には亜鉛メッキをして錆に強くしていくように指示してますから。』

文太「少し位なら俺が出してる所にもストックあつただろうけどな…。」

さつき『ああ、鈴木さんの所にも電話して欠品してたんでストック分で送っておきました。』

文太「はあ？昨日のうちにそんな事してたのか？まったく…仕事ちやんとやつてるのか？」

さつき『やつてますよ？昼休みに金型屋と部品屋に電話して仕事が

上がったから直接越谷に乗り込んだし。その場で鈴木さんに電話して送る手はず取りましたよ。』

文太「何ちゆく行動力だよ…仕事のできるやつってのはこう言う事を言うんだらうな。負けたよ。」

さつき『まあ…今回はちよつと不可抗力とは言え、物凄かったんでね。高橋 涼介だけじゃお手上げになってるのが目に見えてたんでこつちから動いてみました。一応隠密部隊…っていうか、ドライバー2人には美奈子とひっくるめて〃プロジェクトDの暗殺部隊(アサン)〃って言われてしまったのでね。(ニヤリ)』

文太「ワイワイ、すげえネーミングだな。ホントに壊滅しかねないから恐ろしいな。」

さつき『やるからには…叩き潰して2度と起き上がれない位まで行くつもりでしたから。その前に逃げて行きましたけどね…』

文太「まあ、そうだらうな…あんたが本気なのはよく解ってるしな。」

さつき『つて事でご報告を兼ねて、拓海君をあんまり厳しく叱らないでやってくださいね。あ、油揚げと豆腐の代金…いくらでしたっけ?』

文太「ああ、金はいらねえよ。今回色々してもらっちゃってるしな…」

藤原豆腐店でありがたく油揚げと豆腐を頂いて一旦帰宅…今日は休みでちようど起きてきた美奈子にこれを渡して…仕事に向かう…

スタンドに着いてロッカーで着替えていると…ピロリンツというあんまり聞いた事の無い着信音が。

携帯を見ると…謎のメアドから来た不吉な予告。読んでも消す事は無く、高橋 涼介にも見せるつもりでいた。

下に降りると池谷君がちようど接客が一区切りついて自販機でジュースを買ってた。

池谷「さつきさんおはようございます…って何かありました?」

プシュツと炭酸飲料の栓を開けながら聞いてきた。

さつき『あ？ああ…おはよ？ん？何か変な顔してるって？…そりや、多分このせいかもな。』

さつきロッカーで着替えてた時に聞きなれない着信音で届いたメールを見せる…。

池谷「なつ、なんですかこりや…パツと見からして尋常じゃない…脅迫メールじゃないですか…この事は高橋 涼介には？」

さつき『いや、ついさつきこのメールが来たばかりだし…まあ見せるつもりでは居るけれど。それなりに探ってからでも良いかなって…。』

池谷「イヤイヤイヤ…これってマジで警察レベルですよ？あ、さつきさんに届くって事は美奈子さんとか沙雪さんは？下手したら真子ちゃんにも届いてるんじゃない？でも真子ちゃんはまだ入院中だし…

(※真子ちゃんの入院した経緯は3rd Stageのそれぞれの恋愛事情：2-2と2-5を参照してください。この部分にRフラグは無いので大丈夫なはず。作者注。)

2人に電話…してみますか？」

さつき『あゝ、美奈子は今日休みだから何かあれば電話か直接ここに来ると思うよ。沙雪だって電話してくるだろう…1人で溜め込むタイプじゃないし。』

池谷「ま、まあそうですね…何か引つ掛かりませんか？手の込んだいたずらだけじゃないような…」

さつき『取り敢えず連絡してみるか。池谷君…悪いけど店見てもらっても良い？裏で電話してくるわ…』

池谷「了解です。任しといてください」

ホント、池谷君が居ると作業もできるし、ありがたい。

さつきは裏の事務室の机にメモ紙を置き…ボールペンを持ちなが

ら電話をかけ始める。

さつき『あ、美奈子？俺だけど…ちょっと聞くけど、携帯に変なメール来なかった？ん？あ、来てる？それって何時頃？…あ、俺にもそれ位の時間で送られて来ててさ。』

沙雪と高橋 涼介にも連絡してみようかと思ってさ…。」

取り敢えず美奈子が沙雪と真子ちゃんにメールしてくれると言うので高橋 涼介に先に電話してみる。するとーコールで出た。若干こっちが驚いたわい…；；；

さつき『あ、高橋のお兄ちゃんかい？さつきだけどさ…変なメール来た？あ、やつぱり来てるか…え？拓海と弟にも来たってか。こりや本気でプロジェクトDを潰しに来てるな…しかも内容的に俺と美奈子が関わってるのが気に食わないって感じを受けないか？』

高橋 涼介「ん？まあ…そう取れなくもないか。心当たりとか何かあるか？」

さつき『ん、この前の○○○峠でつぶし損ねてるから…ってだけじゃなさそうだしな。ホワイトボディーや他のパーツを俺が動いてかき集めてるのを知ってる感じがするからな…。金型屋を含めた部品屋の関連かあの峠の連中か…その先の神奈川の連中って事だっただけあり得る。俺が神奈川の人間だろ？元々は。』裏切者』扱いかもしれねえしな。』

高橋 涼介「まあ…俺の方で出来る所から調べてはいるがな。ただ警戒するに越した事は無い。美奈子さんにも、Impact Blueの2人にも…周囲には気を付けてくれと言っておいてくれないか？」

さつき「美奈子には真っ先に言っておいたけどな。沙雪や真子ちゃんにも周囲に気を付けるようには言ってもらってる。あの2人も美奈子に車を貸した事でこっち側に巻き込まれてるからな。それにしても…回りくどい事をしてくるんだな。心理的作戦のつもりなのかな？」

高橋 涼介「それだけプロジェクトDの周りが暗殺者軍団（アサシン）と協力者で出来てると思ってるんだろ。」

さつき『2人で“軍団”って言うのか？軍団って言ったら少なくとも数十人単位じゃないのか？』

高橋 涼介「向こうからしたらたつた2人の殺気には見えなかったんじゃないのか？それこそ何百の暗殺者軍団が控えてると思ってるのかも知れないぞ？」

さつき『んなアホな^^;;ま、お互い変なメールが来てる事だし、気を付けるに越した事は無いって..な。悪かったな、突然電話して。』

高橋 涼介「フツ..ま、いいさ。これからも何かあったら電話してくれ。こつちからも何かわかったら電話かメールする。」

さつき『おう、了解です。じゃ、またな。』

ピツ..

切った所でメールの着信。開くと美奈子で、沙雪と真子ちゃんには今の所被害は無いらしいが..念のため気を付けるように言ってるらしい。

(※さて..敵が動くなら迎撃も兼ねての臨戦態勢を早急に..か。)

独り言をつぶやいたさつき。(先手必勝とも言うし..まずは根回しからかな?)

まず、部品屋と金型屋、板金塗装工場にプロジェクトDのメカの人達やサポート隊にも取り敢えず警戒するように連絡。

仕事の休憩中にコピー用紙数枚を抜き取ってきて俺の知ってるプロジェクトDの予定と原作をすり合わせてみる事に..。

確か原作ではヤビツでチーム246とやったり、高橋 涼介の恋敵と箱根ターンパイクでバトルしたり、最後は確か大観山からスタートの椿ライン下りで86対決だったはず..

遠征ついでに国府津の田島峠とか秦野の震生湖の辺りとか大磯の虫窪の辺りとかもホームだったし肩慣らし入れてえな..とか色々思

う所はあるのだけれど、

まずは原作に沿うところから行かないと俺だけの単独行動じゃないし…

そうすると…まずはヤビツか。ここの攻略はネットで見る限り地形もコース幅も何ら変わらないので路面状況だけ軽く見ればドライブには細かい所まで伝えられる。

ま、問題ないな。次に走る人物情報のチェック。うくん…通り一遍で掴み切れねえくな。

(?▽?…)

やっぱ、実際に走った方が早い事に気が付いた。明後日休みだったな…NOTEで視察してくるか。そこまで調べて仕事に戻る…と

オイル交換×2台(うわお…しかもこの車って営業車だから時間かけられないし、オイルエレメントが面倒な所に付いてるやつじゃん…火傷覚悟だなへ…)

それに、LLCの抜き替えにドライブシャフトのブーツ交換…作業がてんこ盛りじゃんか

(?▽?…)

それまでひたすら頑張ってた池谷君を休憩させて作業を黙々と頑張る。給油は高校生の

バイトと樹に任せてる。

1時間後…池谷君の昼飯休憩が終わった頃…オイル交換は終わり、LLCの抜き替えは

エア抜きしつつ、リザーバータンクに多めに入れながら暖気終了後スロットルを開けて

冷却水路のエア抜き実施。ドライブシャフトは左が終わって右の古いシャフトブーツを

剥がし終わってパークリナーでグリス落として新しいシャフトブーツの片側を

固定してグリスを注入中。現状で残ってた作業の85%位終わってたので

池谷君が2度見してた…

池谷「うええええ！もうそこまで終わっちゃってるんですか？だつて前（ドライブウエー||給油機の並んでるスペース）を見ながらでしよう？」

さつき『まあ…樹も居たし…ね^^;;;』

暫くして…残りの作業が終わると早番だった樹の上がる時間に。

池谷「樹く！お疲れ！上がっていいぞお！」

樹「池谷先輩、さつきさん！上がっちゃいますね^^じゃ、また明日きます！」

さつき『おう！お疲れえく』手を洗いながら答えた。

(※)——side change ここからはさつきsideで進行します——)

それから2日後…公休日なので朝、美奈子と同時に家を出て神奈川に向かう。

あ、偵察だしちゃんと目立たない様にNOTEで行動してますつて^^;;;

まずは秦野中井ICで降りてヤビツ峠に一直線。あくこの道変わらんなあ…

舗装も荒れてるし道幅が一定じゃないし…^^;;;ここで走るならギリギリまでコース幅を取る事とすれ違うタイミングを間違えないこと…沙雪がこういうの得意なんだけど、

このタイミングで見えたからあと2つ先で出会う…とかね。それに昼間だと競技用の

チャリリンコに乗ってる連中がやたら多くて真ん中まで出てきてコーナーリングしやがるから危なくて。

ん？平日の昼間に走り屋仕様が居るんだ…へえ…珍しい。こっちは群馬ナンバーだし、



観光客を装ってちよつと気配を消して後ろに付いてみるかな…どんな運転するんだろ？

コーナー2つ見て解りました。はっきり言いましよう！樹より下手だわ。(…|…A

カッコ悪いねえ。邪魔だし、譲っていただこうかな…バスも運行されてる区間なので

コーナーの出口で並んで一気に前に。

県外ナンバーのNOTEに抜かれたのが悔しいのか露骨に煽って来てるけども…

さつき『さて。ここから先の溝落としのできるS字の区間で…俺に付いて来れば良いね…』つと呟く。

一気に溝落とし敢行。一気に離れる車間…一瞬何が起こったんだかわからないって顔で

間抜け面でポカーンとした後必死にアクセル踏んでる様だけでもライン取りはしつかり

しようね…無駄なブレーキングが増えるだけで速くはならないから。

次の道幅2mの区間で…一気に加速。ダメだなあ…ここで70位でビビってちゃ。

俺が現役の時…美奈子と110ちよい位でここ抜けたんだけど…な…まあ、美奈子が異常なだけなだけだよ。(↑柵に上げてるけどお前もだかな！ 作者注。)

展望台まで来る頃には影も形も見えなくなった…この先…清川村側の「裏ヤビツ」に

入っていくともっとデンジャラスな光景が広がるんだよな…たまにがけ崩れがそのまま

放置されてたり、雨が続くところまでが道でどこからが川だか解らなくなるし…

突如、目の前を鹿が出てきて横切ったり…あ、湖にかかる橋とトン

ネルが見えてきた：

そろそろT字路で左が山梨の道志方面で右に行けば半原経由で厚木方面：つと。

ここでサイドターンして秦野側に戻りますかあ！

ブオオオオオンツ！ギュキュキュツ！グオツ！グオツ！グオオオオオオオ〜ンツ！

戻っていくと：あゝあ、どこのバカだよガードレールに突っ込んで“クワガタ虫”になってる奴は：つて、これさっきの奴かゝゝゝゝゝ；  
ここは放置！ え）

人物の特定は：ま、いっかあ。とヤビツをそのまま去って無性にホームを走りたくなり：

ヤビツを降りてきてT字路を右折：渋沢に向かう途中で左折してR246を跨いでつと：

小田急線を潜り抜けてビーバー○ザン（※神奈川ローカルなホームセンターね）のある

交差点を右折して山に入っていく。

（うっわ…この感じ懐かしいな…）思わずつぶやく独り言。

上り切ると震生湖の看板が見えるけど、ここを道なりに進んで下つて上つて左折して：

その先の東名高速にかかる橋を越えてT字路を右折。

さてと”広域農道やまゆりラインを一路：田島峠（通称”みかん山”）に向けて走る。

ここは平日の昼間は特に車が居ないから走りやすいけど：

たまに白バイ居るんだっけかゝゝゝ；；；採石場を横目に道なりに進めば最後にT字路。

ここを右折すれば田島峠。ここも曲がつてすぐにネズミ捕りをやってる事がある：

つて、おつとおくやつぱりやつてるじゃないかあ。あつぶねえゝゝゝ；；；

時間軸がずれててもやるのは一緒なんだねえ：

ここは自分的には二宮側から国府津側に上っていくと上りはカーブも比較的緩やかで

ハイスピードセクション。逐道を越えて下りに入ると道幅も若干狭くなるけど…

まあそこそこ出せる。

一旦、下り切った交差点を越えてUターン、元来た道を走り始める…

さつき『そう言えば…文太さん言ってたっけか。ホームのありがたさに気が付くときがある…ってな。確かにホームだからできることもあるしなあ…』

久しぶりに走ると新鮮に感じるもので…(んくならもう1個行ってみるか…)

：田島峠を下り切ってやまゆりラインに戻らずそのまま二宮の方向に直進…

坂呂橋の交差点を右折、次を左折して坂を上って下り切った右手に西友がある交差点を

右折して…南に少し走ると最近全然来てなかったのに変わる事の無かったタクシー会社のある交差点を左折。一路、虫窪を目指して上がっていく。ここは免許を取って初めて

走りこんだ場所…そう、俺の走り屋人生の出発点。

ホーム中のホーム。走り始めた時の思い悩んだ事まで一気に思い出しながら走っていく。頂上まで行くと路線バスが。

あ、そっか、ここって路線バスの運行区間だったね…；…；時間調整してるようだったので一気にパスして下り始める。

“昔、このS字コーナーがうまく処理できなくて悩んだ時期があったっけ…”

とか、色んなエピソードが出て来る。

ホームを回ってるうちに…走ってて唐突にもう1度実家を見て諦めを付けたくなった。

ここからなら15分の距離…この辺りになると信号のタイミングまで知り尽くしてるから

ほとんど信号にも引つ掛からない。

到着した2008年に引つ越してくる所はまだ畑のままだった。

フツ…と納得した笑みを浮かべると車に戻り、元々住んでいた引つ越す前の家に行く。

だがそこには意外な出来事が待ち受けていた…

近所の空き地に車を止めて歩いて通りの一番奥の家を目指すと…家は無くなっていて…

綺麗に整地され、駐車スペースと思われる部分にコンクリートが打つてある。

奥の水路側の壁に寄せてトレーラーハウスが置かれていて、しっかりと電気の配線もされてるし、ガスボンベに水道も完備されてる様子。驚きを隠せないまま、その前に置かれたポストを見る…そこに書かれていたのは

“小長井さつき、沙雪、美奈子”の文字が…

さつき『は？ちよつと待て…この展開ってどういう事だ？何も聞いてないし、いつの間になんな事になった？マジかよ…』

ブツブツ独り言を言っていると背後に人の気配。振り返るとそこに居たのは沙雪と美奈子!?やべえ、ダメだ…頭が付いて行かない…こめかみの辺りを押さえて蹲る俺。

2人は俺を両脇から抱えるようにしてトレーラーハウスの中へ。奥のベッドに連れていかれた。

そこでベッドに座る3人。

美奈子「言わなくてごめんね。実は先月の初めにね…あたしもここに見に来てたんだ。そしたらモノの見事にさつきの家…無くなって不動産屋さんの管理地になってたのね。で、沙雪にその場で電話をしたらね…」

視線を沙雪に送る。

沙雪「美奈子！今すぐその土地押さえて！って言ったわ。ここをあたし達のセカンドハウスにすれば良いじゃん？ってね。」

美奈子「それにね…家だと固定資産税掛かるけど、トレーラーハウスだと固定資産税掛からないから土地だけの税金で済むって。」

沙雪「費用は会社の役員手当で賄うって事で。」

さつき『は？何か色々ツツコミしたい所が満載なんだけど…???まず、先月来てたの？ここに？しかもこの土地が売りに出てるって凄いやイミング…2番目、すぐに押さえろって？役員報酬で払うって誰の役員報酬？それに…ポストの表記。まだ俺と沙雪は結婚して無いのに…？え？え？説明プリーズ』

沙雪「じゃあ、まああたしから説明しようかしら。1つずつ順序だててね。」

まず1つ目。ここ、ダーリンの実家があった場所だけど、今から1か月ちよい前に

長女の智子さんが結婚を機にご両親も同居するって事でどいたみたい。

で、美奈子はこの世界に来てから神奈川に行った事が無いって事で来てみたら話に聞いていた家が更地になって不動産屋の貼り紙が出てたのを見てあたしに連絡してきた訳ね。

2つ目、役員報酬の話。あたしが代表取締役の役員報酬を給料と別に受けてるのは解るよねえ？

ついでに美奈子もカフェの店長になった時に取締役幹部を引き受けてもらってます。

だからここでも役員報酬が給料と別に出てる訳ね。で、更に再来月のあたしの誕生日に入籍…って言うてくれたじゃん？って事でおめでとう、さつき君にももれなく、高崎製菓株式会社の取締役員”の役職が追加されて役員報酬がちよこつとですけど出ます。

だからこの3人の役員報酬でローン組んじやえば支払えなくはない…って事。」

さつき『へえ、初耳な事がいっぱい…ってというか、美奈子って店長兼役員だったの？』

マジか…その割にカツコとか全然変わらないね…;;;

美奈子「別に店長の職と役員を混ぜる事は無いし、年中着飾って無きやいけないって訳でもないし。着飾ってたらパフェは作れないしね…;;;

で、役員報酬が…引き受けてからの2か月で1年分のバイト代かな  
^^;;;;  
手つかずだったし…土地とトレーラーハウスの購入代金の頭金に  
入れちやっただのよ

^^;;;;  
沙雪「つて事なんで今後はもう1個トレーラーハウスを増設予定だ  
から…」

それを玄関を兼ねた廊下でつなげば3人が無理なく住める家が神  
奈川にもできたつて事。これから神奈川の2戦もあるんだし…あた  
し達はここから向かえばOK。

車も2台止められるし。」

さつき『話の規模がデカいネ…。あ、それに俺がここに来るつてよ  
く解ったね?』

美奈子「そりやあ…ヤビツからホーム回るなら…ここにも寄るつて  
確信あつたしさあ…」

だからあたし達は一気に朝、役員会だけ出てここに一直線で来て  
待つてたつて事。」

さつき『はあ…この2人凄すぎるわ…降参です。』

沙雪「だから襲つた次の日の朝言つたでしよう?”他の世界から迷い  
込んで来ちやっただ事を話した所で信用しないか、あたしが離れるとで  
も思った?逆よ。絶対にこの世界から離してあげない。ダーリンは  
あたしの愛をひたすら受け続けてれば良いのよ。”つて。

覚えてない?」

さつき『うつ、そ、そゝ言えば…そんな事言つてたけど、こんなに  
大々的だなんて…」

(一般庶民に考え付くはずなかろうに、…;;;;つて言うか…沙雪の本  
気つてすげえくな。やっぱ、エロ・テロリスト…爆弾の落とし方がエ  
グいなあ。)

沙雪「で、納得してくれたかしら?で、改めてここはあたし達3人  
の神奈川のおうちなんできつろいじゃってください〜い(〜♪

何ならあくんな事も、こゝんな事もあたしに任せてもらえれば…」

美奈子「ワイワイ…何をサラツと従妹の前で言っちゃってんのよ、  
^ ; ; ; ; ^」

さつき『んくさ、さすがに今日は遠慮しとく。』

沙雪「えく!! 久しぶりに…フツフツフって思ってたのにいゝ。」

美奈子「あ、そうだ！ 思い出した。高橋 涼介から電話来てない?」

さつき『あ、電源切れてるかも…しかも車の中に置きっ放しだし。』

沙雪「…はあく、まったく。そんな事だろうと思ってたわよ。犯人が  
解ったつてよ。」

メールを送ったのは前に埼玉で妨害工作をしたけど、後ろに付いて  
た暴走族が高橋 啓介の高校の時の舎弟だったから丸く収めて終  
わったんだけど…

他のヤクザっぽいのに依頼したらしくてね…ただプロジェクトD  
の暗殺部隊の尋常じゃない殺気にヤクザが怖気づいて、一旦撤退して  
別角度で心理戦を仕掛けてきたつて訳。

で、高橋 涼介の知り合いの弁護士から手を回して県警本部のお偉  
いさんを使って依頼したヤツごと別件で逮捕して厳しく追求中だつ  
てき。」

さつき『よくもまあ…短時間でそこまで調べたね…^ ; ; ; ; ^』

沙雪「ま、すべてがクリアになったから、高橋 啓介と拓海君の車  
が直ればセッティングをして…間に合わなきや暗殺部隊で制圧する  
…つて事になつてるらしいよ。」

美奈子「だから今夜はここにS13とS15置いて行っちゃおう  
かって。」

さつき『ん? S13は解るけど…S15? 美奈子が運転して持つて  
きたのか? 何でも水面下で遂行するねえ…つて事でS13とS15  
をここに置いて…NOTEで帰るつて事ね?』

沙雪&美奈子「「しよくゆゝ事お」」

※で、結局NOTEに3人乗車で帰宅。 神奈川決戦が終わるまで沙  
雪が美奈子の送迎するんだつて…マジでこの2人仲良すぎ… ; ; ; ;  
(まあ、真子ちゃんも入れれば仲良し3人組なだけどさ。 何か更に

結束力固くなってる気がするんだよなあ…)



で、週末……を前に車が無事戻る。

(※——ここからはさつきsideで進行します——)

結局FDも86もしつかり完調な状態で戻って来たので、週末は俺と美奈子がドライバー2人をman to manで横に乗ったり、せっかく持つてきたからS13とS15で先導したり

他の俺のホームコースも走らせて気分転換させたりしてあれこれ使えそうな走り方を伝授…。

そしたら元々器用な2人。キチンとこちらの教えたことを理解して良いタイムを連続できるように…とりあえず1つ壁を乗り越えたかな…。

北条と横にくっついてる関西弁のおっちゃん…何て言ったつけ？

あ、久保さんだつけ？

あのおっちゃんにも休憩してたら話しかけられたつけ…S15が湘南ナンバーだから気になったんだろうけどさ。

でも、俺達2人が“銀色の悪魔”と“漆黒の闇に浮かぶ銀色の幽霊(ゴースト)”…だとは解って無かったらしく…本番で高橋 啓介と拓海が相手をやり込めた時のあの悔しそうな苦虫を噛み潰したような顔を見て…正直スカツとした…コーチした甲斐があると言うものです。

しかもとどめを刺すように高橋 涼介がああ2人の目の前で俺と美奈子の正体をばらしたもんで、

サイドワインダーもそうだけど、見に来てて傍にいたチーム246の連中とか

ゼロのお兄さんが目を丸くして驚いてたつけ…；；；；

まあ、“銀色の悪魔”も“漆黒の闇に浮かぶゴースト”もどつちにしても生きる都市伝説みたいなものだしねえ…

あ、そういえばこの日沙雪が前乗りしちやっただけで、真子ちゃんには池谷君が迎えに行つて一緒に見に来てたな…。そりゃあもう、ラブモード全開でしたけど…

美奈子と俺が関与してしまった事で原作とちよつと離れてしまつたけど、

最後はプロジェクトDのWエースが復活、見事勝利を収めたことでプロジェクトDの活動もこれでピリオドが打てたし、どうにか当初の原作の結果のラインに戻せて良かったなって正直思った。(↑ワイヲイメタいつて^^;;;) )

この後：Dのエース2人はそれぞれレースの道に進むのだが：俺たちの手助けはここまで。後は自力で頑張ってください。俺はレーサーじゃないからそつちの事は全く知らないしね^^;;;

真子ちゃんに聞けば解る事もあるんだろうけどさ：俺はスタンドのお仕事もあるし、

大きな声じゃ言えませんが、俺の身に結構大きな転機になるかも知れない事柄が：

あるとか無いとか^^;;;(↑どつちやねん!!)

それに：ついぞと言つちやなんだけども、沙雪の実家の取締役の会議も始まるしね^^;;;(↑ついぞで^^;;;それ結構大事だからな！ 作者注)